

ディズレーリ三部作におけるユダヤ主義について

藤 田 繁

I. 三部作まで

私がこのテーマで小論を書こうと考えたのは、二つの動機による。一つは、昨年発表した拙論「Daniel Derondaにおけるユダヤについて」で追究したテーマの流れを遡求することであり、今一つは、ベンジャミン・ディズレーリ (Benjamin Disraeli) が英国近代史で演じた役割の大きさとその掘って来るところに興味を惹かれたからである。

「作家の死」が提唱されたのはずい分前のことであるし、自伝と作品は切り離すべきだといわれてからも久しい。しかし、ディズレーリの場合は、むしろ癒着をてこに、プロパガンダとして小説を書き、それによって政界で成功を納めた。従って、作品が彼の実人生および当時の政界や社会をリアルタイムで描いている面がある。

1804年12月21日に、アイザック・ディズレーリ (Isaac D'Israeli) の長男として、ロンドンに生まれた。ディズレーリ家が英国に移住してきたのは、ベンジャミンの祖父 (1730-1816) がヴェニス近郊の街からロンドンにきた1748年であった。同名の祖父ベンジャミンはユダヤ教徒として一生を終え、1816年にアイザックに大金を遺して他界した。そのひとりっ子のアイザックは、ヴォルテールやルソーの思想的影響を受け、1817年にユダヤ協会衆組織を脱会したが、キリスト教徒にはならなかった。しかし、三人の息子には国教会の洗礼を受けさせた。長子のベンジャミンにも1817年に

洗礼を受けさせている。

アイザックはビジネスや政界に出ることはなく、読書三昧の生活を送った。結婚後も大英博物館の読書室に入りびたりだった。彼の夢は浩瀚な英国文学史を書くことであったが、結局 *Curiosities of Literature* (『文学よもやま話』) 程度の形をとただけであった。それでもこの書はその世界ではそれなりの評価を受けて、彼の名前も知られるようになった。元祖ベンジャミンを、'Against Commerce, Which is the Corruption of Mankind' なる詩を書いて落胆させた人物である。他に *Life of Charles Stuart* (『チャールズ・スチュアート伝』) を物している。

この父が長男のベンジャミンに望んだのは、法律家になることで、その方面の教育に大金をかけたが、ベンジャミンの野心は文学と政治にむかった。父の教育と本の影響を強くうけたベンジャミンは、ついに科学の知識を積むことはなかった。イートン、オックスブリッジのコースをとらず、私的教育に徹したとっていいだろう。

父親の紹介で出版社のジョン・マレー (John Murray) の所に入入りするようになり、マレーが手がけていた *Quarterly Review* 誌と、タイムズに範をとる新聞を出すことになった。雑誌の編集はウォルター・スコット (Walter Scott) の義理の息子ロックハート (John Gibson Lockhart) に依頼した。しかし、20歳の青年が出版界を御することは無理であった。事業は失敗するが、この若者はただでは起きなかった。借金を清算するために、経験を生かして自伝的小説『ヴィヴィアン・

グレイ』(Vivian Gray)を書いたのである。出版は1826年だから、書きあげた時はディズレーリはまだ21歳になっていなかった。これによって200ポンドの利益を得ると共に、リットン(Edward Bulwer Lytton)などの文人との交友も始まった。この処女作でディズレーリはある程度の成功を収めたが、小論の、かつディズレーリの永遠のテーマである「ユダヤ」についてはまだ扱っていない。

新聞事業の挫折と『ヴィヴィアン・グレイ』のモデルになった身辺の人たちの非難を逃れて、ディズレーリは旅に出る。これが後の彼の思想に大きな影響を及ぼすことになる。貴族の「大旅行」(the Grand Tour)がフランス、スイス、イタリアを目ざしたのに対し、ディズレーリはユダヤ人としてのアイデンティティを求めて、スペイン、地中海、ギリシア、トルコを経て、エルサレムへ向ったのである。旅行と自己発見や自己発展と結びつけてバイロン(George Gordon Byron)が既に*Childe Harold's Pilgrimage*で名声を博していた。ディズレーリもこれにならって、帰途の船上で2冊の小説を書く。*Contarini Fleming*と*Alroy*であるが、この小論のテーマと密接な関係があるのは*Alroy*の方である。これについては、三部作を論じる際に触れるつもりである。

政界入りをねらって1832年から37年にかけて4回の選挙に敗れた彼に幸運がめぐってくる。ウィリアム四世が死去し、ヴィクトリアが女王になったとき、国会が解散され、総選挙が行われることになった。最初の2回は「ラディカル」(急進派)として立候補し、あとの2回は「トーリー」として敗北した彼だが、今回は彼の熱烈な支持者であるウィングダム・ルイス夫人(Mrs. Mary Anne Wyndham Lewis)からメイドストーンの保守党席を提供され、彼女の夫と共にその地から国会議員になる。

1838年3月、ウィングダム・ルイスが死ぬ。ディ

ズレーリは遺産とロンドンの屋敷をひきついだ未亡人メアリ・アンと1939年8月28日に結婚する。ディズレーリ34歳、メアリ・アン46歳であった。この結婚が必ずしも金と地位のためとはいえないのは、『シビル』を妻に献じて、‘a perfect Wife’と記していることからでも推測できよう。メアリ・アンを金銭をねらって獲得したがっていた男や愛していた男は他にもいたし、肖像を見るかぎり魅力的な美女であった。もっとも、ディズレーリの周りには若く美しい女性がいつもとりまいていたが。

English literature owes a debt of gratitude to Peel—or to Stanley, if to Stanley it is more appropriately due; their exclusion of Disraeli from office in 1841 led to *Coningsby* and *Sybil* and the creation of the political novel.¹⁾

*The Life of Benjamin Disraeli*の著者は第2巻197頁で上のように述べている。メアリ・アンを知って以後——ある書は彼らは結婚前にすでに‘intimate’だったといっている——政界で順調に伸びてきたディズレーリであったが、保守党内で重用されなかった。そこで党内批判党を結成した。それが‘The Young England’「青年英国党」であった。上の引用はその間の事情を言っているのである。『コニングズビー』も『シビル』も「青年英国党」のプロパガンダ小説といっても過言ではない。宗教に傾く『タンクレッド』(*Tancred*)もややターゲットから離れるが、その一環であり、「青年英国党三部作」(the ‘Young England Trilogy’)とよばれる所以である。「青年英国党」のプロパガンダと述べたが、中心のアイデアはユダヤ主義である。以下三部作を順を追って解析して行こうと思う。

II. 『コニングズビー』 (Coningsby or The New Generation)

実は、ディズレーリは三部作の根幹になる政治的姿勢を、1835年に *Vindication of the English Constitution in a Letter to a Noble and Learned Lord, by Disraeli the Younger*, 通常「英国憲法の擁護」と呼ばれるパンフレットで表明している。内容、力強さにおいて、一部では注目されたものの、広く大衆に訴えることはできなかった。今は小説の時代と認識して小説によって、「青年英国党」と新トーリー主義を宣明することにしたのである。『コニングズビー』第5版の序文で、プロパガンダとして小説を使ったと述べている。

It was not originally the intention of the writer to adopt the form of fiction as the instrument to scatter his suggestions, but, after reflection, he resolved to avail himself of a method which, in the temper of the time, offered the best chance of influencing opinion.²⁾

『コニングズビー』は、セアラ・ブラッドフォードがいうように、「英国最初の政治小説 (the first English political novel³⁾)」である。ウォルター・アレンは三部作が政治小説であることを更に明確に断定する。「ディズレーリの小説は政治から、ただ政治だけから生まれ出るのだ。登場人物も事件もただただ政治を通して生きてくるのだ⁴⁾と。ここに「政治」というのは、現実に展開している政治のことをいう。M・ウォルター・ダン版では、『コニングズビー』の冒頭の前に、主な登場人物のモデルとして、当時の政治家や社交界の上流夫人の実名が57人にわたって挙げられているのである。

小説は12歳のハリー・コニングズビー (Harry

Coningsby) が祖父のモンマス侯爵と初めて会見するところから始まる。モンマス侯爵というのは *Vanity Fair* に出てくるステーン卿 (Lord Steyne) と同じくハートフォード卿 (Lord Hertford) をモデルとしている大貴族である。ただサッカレー (W.M. Thackeray) が淫乱で狡猾な老人に描いているのに対し、ディズレーリは、過去の無責任な貴族として、しかし、それなりに威力をもつ人物として描いている。コニングズビーは、この人物の次男の孤児で、イートン生である。祖父と会って、緊張のあまり泣き出す少年は、初々しく人間性に満ちている。この主人公がイートン、ケンブリッジ、のち政治家になってゆくのがストーリーなので、見方を変えればビルドゥンクスロマンといえるかもしれない。ただ、人間味にあふれていたこの少年は型にはまった聡明な青年になって、人望を集めるのだが、精神的に成長していくわけではない。自分の人生の目的ないし目標がわからなくて、それを求めて、結局は外から与えられて、国会議員になる。

その外から指導する人物がシドニア (Sidonia) である。彼から何を学ぶかを知るためには、それまでのコニングズビーの状況を見ておく必要があるだろう。モンマス卿邸からイートンに復帰したコニングズビーは三人の貴族の子弟と政治を論じている。コニングズビーはすでに将来も社会で大きな働きをするとイートン校全体で囑望される指導者になっている。このサークルの周縁にオズワルド・ミルバンク (Oswald Millbank) という少年がいる。貴族を嫌うランカシャーの資本家が貴族の権利はブルジョアにもあるという意志表示として、長男をイートンにいらしている。貴族の輪に入って少年はいう。「選挙法改正法案は革命を阻止するだろう、と父はいつているよ⁵⁾と。この物語は1832年の選挙法改正の前夜から始まっているのである。コニングズビーは貴族の立場から、ミルバンクは産業資本家の立場から、興

味をもっている。そんな折に、ミルバンクが川に転落して、コニングズビーが命を助ける事故が起こる。

コニングズビーがシドーニアに旅の途中の森で俄か雨によって偶然会うのは、イートンを卒業した直後である。それまでに読者は、主人公の目を通してではなく、作者の紹介と解説で、当時の政治と社会問題を知らされる。

彼のいる現実社会は貴族寡頭政治が続いており、その代表として、主人公の祖父のモンマス卿が描かれている。彼自身は外国で遊蕩生活を送りながら、子分を通じて政治と関わっている。子分の典型がリグビー (Rigby) である。「リグビー氏はモンマス卿の所有する選挙区の一つから国会議員になっていた。この男はモンマス卿が議会で影響力をふるう代理人であり、卿の広大な領地の監査役であった」。

He was just the animal that Lord Monmouth wanted, for Lord Monmouth always looked upon human nature with the callous eye of a jockey. He surveyed Rigby, and he determined to buy him. He bought him; with his clear head, his indefatigable industry, his audacious tongue, and his ready and unscrupulous pen; with all his dates, all his lampoons; all his private memoirs, and all his political intrigues. It was a good purchase. Rigby became a great personage, and Lord Monmouth's man.⁶⁾

卿はリグビーを馬として評価しているのである。コニングズビーさえも馬とみなしている。コニングズビーが泣いてしまった最初の会見も、「新しい馬 (a new horse) を試乗したいといっているかのように、さめきった冷静さで、『リグビー、

イートンのあの少年に会いたい』と言った」ことから始まったのである。人を馬に見たてる所は *Daniel Deronda* のグランドコートとラッシュヤグウェンドレンとの関係を思わせる。他にも卿のとりたてで議員となっている、タドポウル (Tadpole) とテイパー (Taper) という一対のとんまなあやつり人形もいる。

他方、チャーティスト運動など、'Condition of England Question' に包含される社会問題の芽は出ているのに、それに対応できる政治家がいない。ホイッグ党は現今の問題を作り出してきた張本人だし、保守党はまったく対処する哲学も手法も持たない、ということをや々と著者は述べる。

このような状況下でコニングズビーはイートンを卒業し、ケンブリッジに入ろうとしている。イートン最後の文章を作者は次のように結ぶ。「彼の表情は真剣であった。いや悲しくさえあった。顔を手で掩った」。指導者であった筈の彼には指導理念はなかった。そして旅に出る。そこで出会ったのが、後にその名を知るシドーニアであった。

『コニングズビー』、いや、「青年英国党」三部作の真の主人公はシドーニアといわれることがあるのは、この人物の思想あるいは構想が三部作の骨格をなしているからである。主人公達はこの人物のダミーに見えかねない。モンマス卿と手下の関係と似たところがある。作者はこの人物を 'An Interesting Stranger' と紹介して、名前と出身はずっと後で明かす。森をさまよいながら、コニングズビーは考える。

Often, indeed, had he needed, sometimes he had even sighed for, the companionship of an equal or superior mind; one who, by the comprehension of his thought, and the richness of his knowledge, and the advantage of his experience, might strengthen and illuminate and guide his obscure or

hesitating or unpracticed intelligence.⁷⁾

教養小説にしては他力本願的にすぎるといえよう。彼の教導者として、見知らぬ人シドーニアが嵐の中から突然現われるのである。「星の娘」という名の、最高のアラブ馬に乗って。コニングズビーより10歳ほど年上——ということは28歳——で、「青白い印象的な顔と、すごい知性を示す黒い目」の持主と主人公に見える。アテネへの憧憬を口にすると、まず第一の託宣が下る。

‘The Age of Ruins is past. Have you seen Manchester?’⁸⁾

廃墟の時代は過ぎた、も、マンチェスターも、以後のコニングズビーの大方針になるのである。次に旅籠の清潔さを誉め、「モーゼとマホメットは清潔を宗教にした」と見知らぬ人がいう。「清潔」も当時のイギリスの中心課題であった。青年はこの旅人を超人のように崇める。

Coningsby had never met or read of any one like this chance companion. His sentences were so short, his language so racy, his voice rang so clear, his elocution was so complete. On all subjects his mind seemed to be instructed, and his opinions formed. He flung out a result in a few words; he solved with a phrase some deep problem that men muse over for years. He said many things that were strange, yet they immediately appeared to be true. Then, without the slightest air of pretension or parade, he seemed to know everybody as well as everything. Monarchs, statesmen, authors, adventurers, of all descriptions and of all climes, if their names occurred in

the conversation, he described them in an epigrammatic sentence, or revealed their precise position, character, caliber, by a curt dramatic trait. All this, too, without any excitement of manner; on the contrary, with repose amounting almost to nonchalance.⁹⁾

シドーニアのモデルがライオネル・ネーサン・ロスチャイルドであり、理想化されたディズレーリその人であることが、この引用からも推測できよう。見知らぬ人が「個人の影響力」(The influence of an individual)を説いたとき、コニングズビーは、「経験」(experience)が必要ではないかと問う。「偉業のほとんどは若者によって成された」とシドーニアは言って、「天才は若い時は神的である」と続ける。これは一つ前のセリフで彼がいった言葉を具体的に敷衍している。「世論に対して個人は何か」という青年の問に、「神的だ。神は己れの姿に似せて人を創りたもうた。だが、大衆は新聞、下院議員等によってつくられたものだ」と答える。若さは神がかりだというのである。「古代および現代の名将はともに25歳の時にイタリアを征服した！ 若さ、青年がペルシア帝国を覆滅した」。気になるのは、若くして偉業を果たした内容がコルテスのインカ征服など含む、侵略の例が多いことである。このように彼がとうとうと自論を述べるとき、読者は、この小説の副題「新しき世代」を思うのではないだろうか。「青年英国党」の「青年」こそが偉業をなせるのだという自己宣伝の匂いが強いのである。若者の果たした覇業を述べる中で、唐突に「わたしはエホバを崇拝する」という。‘I worship the Lord of Hosts.’なる‘the Lord of Hosts’を文字通り「万軍の主」として用いているのであろうか。ここまで彼はユダヤ人という出自を明かしていないが、これでユダヤ教徒であることは明白になる。

2頁にわたるスピーチの最後を‘The history of Heroes is the history of Youth¹⁰⁾’で結ぶ。

これを受けてコニングズビーが叫ぶ。「ああ、ぼくは偉大な男になりたい」と。すると見知らぬ男は真剣にいう。「君の心を偉大な考えで養いなさい。英雄を信じると英雄になれるんだ」¹¹⁾

「あなたはぼくが長く思いわずらってきたものを教えて下さった」とコニングズビーはいう。しかし、一体何を教わったというのだろうか。

翌日コニングズビーは後に青年英国党の一員になるヘンリー・シドニーの父親の館ボーマノワールにいる。先に紹介されているように、ここは英国の誇る二つのものを合わせもつ社交場、即ち狩猟と政治が実践されている。コニングズビーは見知らぬ人が出した命題を考えている。「偉大な考え」とは？ 自分は「英雄」になるよう運命づけられているのか？ 「偉大な人物とは何なのか？ 大臣になることか？ 勝利をよぶ將軍になることか？」読者はあまりの子供っぽさに不安さえ覚えるかもしれない。後に「青年英国党」を結成することになる、イートンの少年達は、大学に行く前にすでに感じていた。「社会と宗教に関する現況は不健康である。この（宗教上の）自由主義にかわるべき何か健康で深いもの、熱烈で明確なものが必須だ。この新しい信仰の司祭は新しい世代（the New Generation）から見出されねばならぬ」¹²⁾というのである。だからこそ19歳になったコニングズビーの琴線に見知らぬ人は触れたという。

教えに従って主人公はマンチェスターに行く。「廃墟の時代は終わった、マンチェスターに行く好機を逃がしてはならぬ」¹³⁾と突然思い当った。作者は、イートンを出たばかりの、偏見の中で育ちはしたが、探求と思考力を備えた、この「新世代（the New Generation）の代表」は「労働の大都市（the great Metropolis of Labour）」にいざなわれたと書く。「マンチェスターはアテネと同

じほどに人間が樹立した偉業である」¹⁴⁾名も知らぬ人が「廃墟の時代は終わった」と言ったから、と繰り返される。これが「行動」（action）の一步らしい。

From early morn to the late twilight, our Coningsby for several days devoted himself to the comprehension of Manchester. It was to him a new world, pregnant with new ideas, and suggestive of new trains of thought and feeling. In this unprecedented partnership between capital and science, working on a spot which Nature had indicated as the fitting theatre of their exploits, he beheld a great source of the wealth of nations which had been reserved for these times, and he perceived that this wealth was rapidly developing classes whose power was imperfectly recognized in the constitutional scheme, and whose duties in the social system seemed altogether omitted.¹⁵⁾

コニングズビーには産業社会の悲惨な面は見えていない。黙々と働く女工たちが糸くずで肺をつまらされることも知らず、労働に輝いているかに見える。「たしかにマンチェスターは現代の最も素晴らしい都市です！」と、ホテルのコーヒー・ルームであった男に叫ぶと、その男は、あんたの見たマンチェスターは「死んで埋まった」街だ。もっと凄惨なマンチェスターを見たいなら、ミルバンクへ行けという。この見知らぬ男も後に下院議員になる人物である。

ミルバンクは、コニングズビーが命を助けたオズワルド・ミルバンクの父親が経営している工場街である。福祉の行き届いた工場と労働者施設が展開する。この小説より5年後に出版されたシャー

ロット・ブロンテ (Shirlotte Brontë) の『シャーリー』(Shirley) の結末で主人公のロバート・ムア (Robert Moore) が創り出す工場街と酷似している。いずれもトマス・カーライル (Thomas Carlyle) の *Chartism* (1839) と *Past and Present* (1843) の影響を受けていることがわかる。

At some little distance, and rather withdrawn from the principal stream, were two other smaller structures of the same style. About a quarter of a mile further on, appeared a village of not inconsiderable size, and remarkable from the neatness and even picturesque character of its architecture, and the gay gardens that surrounded it. On a sunny knoll in the background rose a church, in the best style of Christian architecture, and near it was a clerical residence and a school-house of similar design. The village, too, could boast of another public building; an Institute where there were a library and a lecture-room; and a reading-hall, which any one might frequent at certain hours, and under reasonable regulations.

On the other side of the principal factory, but more remote, about half-a-mile up the valley, surrounded by beautiful meadows, and built on an agreeable and well-wooded elevation, was the mansion of the mill-owner; apparently a commodious and not inconsiderable dwelling-house, built in what is called a villa style, with a variety of gardens and conservatories. The atmosphere of this somewhat striking settlement was not disturbed and polluted by the dark vapour, which, to the shame of

Manchester, still infests that great town, for Mr Millbank, who liked nothing so much as an invention, unless it were an experiment, took care to consume his own smoke.¹⁶⁾

ミルバンク氏は隣りあっているモンマス卿とライバル関係にある。1832年の選挙法改正法で、卿は12の投票権を失い、経済力で産業資本家が上昇してきているので、かつての優勢を失いつつある。ここでオズワルドの妹イーディス (Edith) に会う。これらの出会いは主人公の将来を決定することになる。

次にコニングズビーがシドーニアに会うのは、モンマス卿がコニングズビー館で催した、豪華なパーティの席である。貴族寡頭政治の一角を占めていたモンマス卿の快樂追求の姿が示される。

The dinner was always first-rate; the evening never failed; music, dancing, and the theatre offered great resources independently of the soul-subduing sentiment harshly called flirtation, which is the spell of a country-house. Lord Monmouth was satisfied, for he had scarcely ever felt wearied. All that he required in life was to be amused; perhaps that was not all he required, but it was indispensable.¹⁷⁾

卿はシドーニアも招待している。貴族たちはシドーニアの資力と情報網について噂している。32章は 'Sidonia' と見出しのある、見知らぬ人の正体が示される章である。

シドーニアがアラゴンの旧家で、古来の信仰と祖先が行なってきた儀式を堅守し、「シナイの神の統一 (the unity of the God of Sinai¹⁸⁾)」および、「モーセの律法の権利と遵守」を信じてきた

一族の末裔であると作者は先ず紹介する。そしてディスポラから現在に至るユダヤ迫害史を10頁以上にわたって詳述する。「19歳の時にはシドーニアは、ナポリの叔父の所に住んでおり、フランクフルトの父の親戚のところに長く滞在したので、主なヨーロッパ語は完全にマスターしていた」と書くとき、彼がロスチャイルドの末であることは明白である。「シドーニアは人類の知識のあらゆる根源に精通していた。あらゆる国の学問を、死語であれ活語であれ、あらゆる言語を、また東西のあらゆる文学をマスターしていた」¹⁹⁾というとき、この人物はユダヤ民族を一身に表現している者らしいと思われる。

He brought to the study of this vast aggregate of knowledge a penetrative intellect that, matured by long meditation, and assisted by that absolute freedom from prejudice which was the compensatory possession of a man without a country permitted Sidonia to fathom, as it were by intuition, the depth of questions apparently the most difficult and profound. He possessed the rare faculty of communicating with precision ideas the most abstruse, and in general a power of expression which arrests and satisfies attention.

With all this knowledge, which no one knew more to prize, with boundless wealth, and with an athletic frame, which sickness had never tried, and which had avoided excess, Sidonia nevertheless looked upon life with a glance rather of curiosity than content. His religion walled him out from the pursuits of a citizen; his riches deprived him of the stimulating anxieties of a man. He perceived himself a lone being, alike

without cares and without duties.²⁰⁾

「国をもたない男がそのかわりに与えられる偏見からの完全な自由」といわれると、読者は首をかしげるだろう。「彼の宗教が壁をめぐらせて市民的追求から彼を守っていた」というとき、その「彼の宗教」こそ偏見かもしれぬという考えは浮ばないだろうか。これほどの超人にも、欠けているものがあつた。「彼は情愛のない男 (a man without affections)」であり、女は彼にとって玩具 (a toy) で、男は機械 (a machine) なのである。コニングズビーはこの部分を補完する存在なのだ。

シドーニアは同じユダヤ人のカール・マルクスとは正反対の考えをもつ。イギリスの危機は「国民の徳の低下 (the decline of public virtue)」にあるというシドーニアにコニングズビーが、「その低下をどこに認めるのですか」と聞く。「この国の諸階級が互いに反目している事実にだ」とシドーニアは答える。「革命が経済的原因で引き起こされるということほど馬鹿げた間違いはないと私は考える」というシドーニアは、何に活路を見出すのだろう。「フランス革命を惹起したのは理性ではない。人間は情熱 (the passions) から行動するときのみ更に偉大だ。想像にうったえる時のみ不可抗力を発揮する」²¹⁾といっても、その情熱が何から何によって起るかは言わない。「人間というのは憧れ従うようにつくられているんだよ。命令してやらなければ、崇拜するものを与えなければ、人間は己れだけの神々をつくって、自分だけの情熱に指導者を見出すわけさ」というが、彼のいう「崇拜するもの」とは何なのであろう。

作家としてのディズレーリは、こんな教義問答を無限に続けることはしない。貴族の豪遊やアトラクション、はてはアヴァンチュールまでずい所に入れて、読者を楽しませる。上記のやりとりの後、当時はやり出した障害物競馬 (steeple-

chase) に一章を与え、再びシドニアのコニングズビー教育が始まる。その章名は「イスラエルの栄光」である。

コニングズビー館を立つ前夜、シドニアはコニングズビーを部屋に誘う。数頁にわたってユダヤ人の優秀性を説く。

Yet the Jews, Coningsby, are essentially Tories. Toryism, indeed, is but copied from the mighty prototype which has fashioned Europe. And every generation they must become more powerful and more dangerous to the society which is hostile to them. Do you think that the quiet humdrum persecution of a decorous representative of an English university can crush those who have successfully baffled the Pharaohs, Nebuchadnezzar, Rome, and the feudal ages? The fact is, you cannot destroy a pure race of the Caucasian organization. It is a physiological fact; a simple law of nature, which has baffled Egyptian and Assyrian Kings, Roman Emperors, and Christian Inquisitors. No penal laws, no physical tortures, can effect that a superior race should be absorbed in an inferior, or be destroyed by it. The mixed persecuting races disappear; the pure persecuted race remains. And at this moment, in spite of centuries, of tens of centuries, of degradation, the Jewish mind exercises a vast influence on the affairs of Europe. I speak not of their laws, which you still obey; of their literature, with which your minds are saturated; but of the living Hebrew intellect.²²⁾

「白色人種の組織 (the Caucasian organisation) の純粋民族は滅ぼされることはありえないのだ。それは生理学上の事実 (a physiological fact) だよ」。この「純粋民族 (a pure race)」とはユダヤ人のことである。シドニアのこのような言葉を聞くと、これを裏返せばヒトラーのゲルマン民族優秀理論になりはしないか。ヒトラーもゲルマン民族の優秀性を「生理学的に」実証しようとした。

一言もはさまないで熱心に聞くコニングズビーに長広舌は続く。「ヨーロッパの大きな知的運動でユダヤ人が大きな役割を果たしていないものはないんだ」と述べて、ヨーロッパ碩学の名前を挙げてゆく。その後自分がめぐった諸国のユダヤの血をひく実力者を列挙する。それは軍人にまで及ぶ。「だから世界は舞台裏にいない人たちが想像するのとはまったく違う人々によって支配されているんだよ」。

「驚きました。とても興味があります」と言葉をはさんだコニングズビーにいう。

'You must study physiology, my dear child. Pure races of Caucasus may be persecuted, but they cannot be despised, except by the brutal ignorance of some mongrel breed, that brandished fagots and howls extermination, but is itself exterminated without persecution, by that irresistible law of Nature which is fatal to curs.'²³⁾

まことに驚くべきユダヤ優越感である。そしてもっと驚くことには、コニングズビーの反応である。

'But I come also from Caucasus,' said Coningsby.

この場合の 'Caucasus' とはユダヤ人を含む。ア

ングロ・サクソンの筈のコニングズビーがユダヤ人の血をひいているというのと同じなのである。

In Blumenbach's division of mankind into five races, the Jews figured in the Caucasian category, which included all the ancient and modern European peoples, except Finns and Laplanders, and many of the Asian; but Disraeli added to this model, as he revealed in reply to some criticisms with an anti-Semitic tinge which appeared in *The Morning Post*, the assertion in the mouth of Sidonia that the Jews enjoyed a special status in this 'first and superior class' as the sole Caucasian strain to remain 'pure and unmixed'.²⁴⁾

ブルーメンバッハ (Johann Friedlich Blumenbach, 1752-1840) は人類を Caucasian, Mongolian, Ethiopian, American, Malayan に分類した。コニングズビーの発言は、コンテキストからいって、ユダヤ人を内包している。ディズレーリは 'pure and unmixed' をシドニアに守らせている。ルクリーシャ (The Princess Lucretia) という18歳のイタリア美女の愛を受けないのは、第一に 'race' の純血を守るためである。コニングズビーがシドニアに三回目に会うのはパリである。「シドニアの女性論」という章で作者は彼にかわって叙述する。

He yielded at once to an admirer; never trespassed by any chance into the domain of sentiment; never broke, by any accident or blunder, into the irregular paces of flirtation; was a man who notoriously would never diminish by marriage the purity of his race; and one who always maintained

that passion and polished life were quite incompatible.²⁵⁾

この考えが作品のストーリーを決定する。信じがたいことだが、ルクリーシャは英国でのモンマス卿のパーティでこの男に恋をする。男が上記の理論で拒絶すると、ルクリーシャはモンマス卿と結婚する。パリの卿の邸宅で二人は再会し、シドニアがイーディス・ミルバンクと結婚するという噂を聞いて、取り乱すことで、卿は彼女の心の内を知る。それが離婚へとつながる。一方、その噂でコニングズビーは直ちに帰英する。小説は最後の五分の一にきて、ドタバタ劇になってくる。誤解だとわかったコニングズビーとイーディスは互いの愛を確認する。その彼にモンマス卿が下院議員になるよう要請するが、同じ選挙区からイーディスの父親が出馬するので悩む。

'I feel that I am not yet sufficiently prepared for so great a responsibility as a seat in the House of Commons,' said Coningsby.²⁶⁾

「青年英国党」のモットーを持ち出すのである。貴族は為政者としての責任をもたねばならない、と。「ぼくらが望むのは新しい侯爵をつくることでもなければ、古い男爵をみがきあげることでもありません。王国を維持し、人民の幸福を確保する大原則を樹立することです」。²⁷⁾

その年にモンマス卿が死ぬ。この拒絶が原因で、コニングズビーに遺産は与えられない。卿の屋敷にいた病弱なフローラ (Flora) が、フランスの女優との間に生まれた私生児であることが判明し、卿は全財産を遺書で彼女にのこしていることが明らかにされる。落胆したコニングズビーの前にシドニアが現われる。遺書執行人の一人に選ばれていたからであるが、主人公の重大な岐路には必

ずこの人物がいる。コニングズビーと会うのはこれが四回目である。彼に外交官か司法官のどちらかになるよう忠告する。金銭で不自由するときはいつでも援助するともいつてくれた。「外交官というのは結局は幽霊なんだよ。彼には国籍がない。外交官は政治のユダヤ人だといつも思うんだ。国も、政治的信条も、庶民的信念も、自由な大国では著名な市民の履歴に浸透している強い存在の実感というものが無いんだ」²⁸⁾とシドーニアがいうとき、ディズレーリの淋しさも伝わってくる。

この小説は、シドーニアの言う通りにすれば成間間違いなし、という筋立てなので、コニングズビーには幸運が必ずほほえむことになっている。やがてフローラが死に、親切にしてくれたコニングズビーに財産の全てを遺贈する。これでシドーニアからの金銭援助は必要としなくなった。

As for Conservative government, the natural question was, What do you mean to conserve? Do you mean to conserve things or only names, realities of merely appearances? Or, do you mean to continue the system commenced in 1834, and, with a hypocritical reverence for the principles, and a superstitious adhesion to the forms, of the old exclusive constitution, carry on your policy by latitudinarian practice?²⁹⁾

これはコニングズビーがミルバンク氏の友人のジョーゼフ卿に語った、「新世代の考え (the views of the New Generation)」である。ミルバンク氏はコニングズビーの思想、自他の状況を勘案して、自分の選挙区の一つを彼に与える。今やオズワルド・ミルバンクとハリー・コニングズビーは国会議員になった。後に続くのは、コニングズビーとイーディスの結婚である。シドーニアの意図が完成されたのである。即ち、貴族と産業資本の結合

である。しかし、ディズレーリが与える答えはこれだけで、最後のパラグラフはすべて疑問符つきの文章で終わる。

They stand now on the threshold of public life. They are in the leash, but in a moment they will be slipped. What will be their fate? Will they maintain in august assemblies and high places the great truths which, in study and in solitude, they have embraced? Or will their courage exhaust itself in the struggle, their enthusiasm evaporate before hollowhearted ridicule, their generous impulses yield with a vulgar catastrophe to the tawdry temptations of a low ambition? Will their skilled intelligence subside into being the adroit tool of a corrupt party? Will vanity confound their fortunes, or jealousy wither their sympathies? Or will they remain brave, single, and true; refuse to bow before shadows and worship phrases; sensible of the greatness of their position, recognize the greatness of their duties; denounce to a perplexed and disheartened world the frigid theories of a generalizing age that have destroyed the individuality of man, and restore the happiness of their country by believing in their own energies, and daring to be great?³⁰⁾

Ⅲ. 『シビル』 (*Sybil or The Two Nations*)

『コニングズビー』から僅か1年後の1845年に
出たこの作品と前作との相違は、同じ「英国状況
小説」の範疇に入りながら、題名に歴然と現れて
いる。前者は貴族の一人である男性主人公の名前
をタイトルとし、副題的に '*or The New Genera-*
tion' が付加されている。即ち、政界のヘゲモニー
をねらう新しい担い手、「新世代」の物語であっ
て、民衆を外においた保守と産業資本家を含む新
保守との権力闘争を描いている。これに対し、
『シビル』は、「人民の娘」とされる女主人公の名
前をタイトルとし、副題的に '*or The Two Na-*
tions' が付加されている。「二つの国」あるいは
「二つの国民」というのは、富めるものと貧しき
ものを指しているのである。後に述べて行くが、
ディズレーリはこれを階級闘争にすることはない。

『コニングズビー』出版から『シビル』出版ま
でに作者に何が起こっただろうか。この作品に関
係していえば、1845年はチャーティスト運動もた
けなわで、支配者側、すなわち貴族とブルジョワ
資本家が革命を身近に感じて危機意識がたかまっ
ていた時である。『コニングズビー』が1832年の
選挙法改正法が通過する直前から、1841年トーリー
勝利までを扱っているのに対し、『シビル』は
1837年から、この作品の出版時までを扱っている。
ディズレーリの時代感覚の鋭さといえよう。コニ
ングズビー即ち貴族とイーディス・ミルバンク即
ち産業資本家を結婚させた作者は、次にこの勢力が
時代の趨勢である労働者階級を中心とした下から
の力にどう対処するかを課題とするのである。

1844年10月、『コニングズビー』の作者として
のディズレーリは、マンチェスター文芸協会主催
の文芸大会の座長になるように招待された。³¹⁾こ
の機会に産業革命発祥の地をつぶさに観察し、ヨー
クシャーまで足をのばして、工場や慈善事業を見

学した。³²⁾また、「青書」を詳読し、オCONNELL
(Daniel O'Connell) とチャーティストとの書簡
を読んだ。これによって、『シビル』執筆の準備
はととのったのである。

小説は1837年のダービー前夜に始まる。若い貴
族たちがヴェルサイユ宮殿にもひけをとらない広
間で、競馬の賭に熱中している。そこへ登場する
のが主人公のチャールズ・エグルモント (Char-
les Egremont) である。コニングズビーと同様、
きわめて魅力的に描かれる。

Tall, with a well-proportioned figure and a
graceful carriage, his countenance touched
with a sensibility that at once engages the
affections. Charles Egremont was not only
admired by that sex, whose approval gener-
ally secures men enemies among their
fellows, but was at the same time the
favourite of his own.³³⁾

この青年は裕福な伯爵家の次男として、甘やかさ
れ、「野心ではなく、快楽が人生の原則のように
思って」³⁴⁾生きてきた。「カルペ・ディエム」が彼
のモットーだった。イートンもオックスフォード
も享楽してきたし、将来は伯爵家のもつ議席をつ
ぐことになっている。しかし、「高潔な精神と優
しい心」をもったこの青年は、24歳の時に失恋す
る。傷心のあまり、帰らない決意で外国へ出る。
だが、一年半後に、「はるかに賢明な人間 (a
much wiser man)」³⁵⁾となって帰国する。「彼の
生き方には、旅の前と旅の後ではこのような相違
があった。即ち、今は目標がほしいと思っていた。
どのようにすればいいのかまだわからなかったが、
行動したいと常に考えているのだ」³⁶⁾

ディズレーリは、1、2章で競馬にうつつをぬ
かす貴族たちを描くと、3章ではエグルモント家
の歴史を語る口実で、彼の英国史観を延々と紹介

する。4章で、1832年の選挙法改正法の結果を述べる。

If a spirit of rapacious coveteousness, desecrating all the humanities of life, has been the besetting sin of England for the last century and a half, since the passing of the Reform Act the altar of Mammon has blazed with triple worship. To acquire, to accumulate, to plunder each other by virtue of philosophic phrases, to propose an Utopia to consist only of WELTH and TOIL, this has been the breathless business of enfranchised England for the last twelve years, until we are startled from our voracious strife by the wail of intolerable serfage.³⁷⁾

しかしディズレーリは、選挙法改正法のマイナス面——彼のいう——ばかりをあげつらうのではなく、「それが人々に考えるようにした。それは政治体験の視野を広げ、人々の心を英国の歴史的情况を熟考するように促した」とする。作者は自分の考えと登場人物の考えとが区別できないように書いてゆく。このような時に、チャールズは帰国したのである。少なくとも、ディズレーリの場合分析に軌を一にして、彼は保守再生へと行動してゆく。「教会が有給官吏になることから救い、故に闘争を通して、労働者一人一人に家庭 (a home) を確保する国家の教区組織を支えた党……この党は偉大な原則と高貴な本能に根源をもち、下層に同情し、至高を仰ぎみる」。³⁸⁾これが彼の理想的保守党なのである。

Even now it is not dead, but sleepeth; and in an age of political materialism, of confused purposes and perplexed intelligence,

that aspires only to wealth because it has faith in no other accomplishment, as men rifle cargoes on the verge of shipwreck, Toryism will yet rise from the tomb over which Bolingbroke shed his last tear, to bring back strength to the Crown, liberty to the Subject, and to announce that power has only one duty—to secure the social welfare of the PEOPLE.³⁹⁾

ディズレーリは、美しい言葉を並べるが、具体策は述べない。「英国の情況」がいかにして生じてきたかを、支配側から、それも「青年英国党」の観点から論じる。同じユダヤ人のマルクスのような分析は、害悪として斥ける。しかし、ターゲットは極めて明確に把握している。この小説の副題を「二つの国民」としたのは、富める者と貧しき者の二層化の現実を把捉し、その両者を統括するのは「青年英国党」であると持ってゆくために、労働者の貧困と悪しき貴族を描くのである。

まず、悪しき貴族として、主人公チャールズの実兄であるマーネー卿 (Lord Marney, George Egremont) が紹介される。この人物は利己主義と社会的無関心を体現している。ホイッグ派で、新救貧法を支持し、小麦関税の堅持を主張する。例によってディズレーリは、当初からこの人物を悪しきまに描く。「マーネー卿の顔貌は彼の精神を語っていた。冷笑的で、感情に欠け、傲慢で、想像力の働かない、かたくなな心の持主であった」。

Lord Marney was several year the senior of Charles Egremont, yet still a young man. He was handsome; there was indeed a general resemblance between the brothers, though the expression of their countenances was entirely different; of the same height and air, and throughout the

features a certain family cast; but here the likeness cased. The countenance of Lord Marney bespoke the character of his mind; cynical, devoid of sentiment, arrogant, literal, hard. He had not imagination, had exhausted his slight native feeling, but he was acute, disputatious, and firm even to obstinacy. Though his early education had been very imperfect, he had subsequently read a good deal, especially in French literature. He had formed his mind by Helvetius, whose system he deemed irrefutable, and in whom alone he had faith. Armed with the principles of his great master, he believed he could pass through existence in adamantine armour, and always gave you in the business of life the idea of a man who was conscious you were trying to take him in, and rather respected you for it, but the working of whose cold, unkind, eye defied you.⁴⁰⁾

ディズレーリの作品が文学的に評価されないのは、最初にこのようにきめつけてしまって、彼のその性質がどのように具体化されるかを辿ってゆくだけになるからである。しかし、『シビル』が文学史上で先駆の栄冠を与えられるのは、このマーネー卿のお蔭である。マーネー・アベイでは、女を喜ばせ、男を寛がせるあらゆるものが用意されているのに対し、マーネー卿の領地のマーネーの町の外部は恐るべき貧困地帯である。作者は初めて農民の極貧と惨状を描く。「これらの住居のドアの前を、しばしば住居の周りを、腐敗して疾病のもとになる動物の臓物や植物の屑をいっぱいおせて開渠のどぶが流れ、時々停滞して汚い穴をみたり、淀んだ水溜になっている。一方、あらゆる種類の分解した汚物の溶液はとけこんで、近くの

家の壁や地面にすっかりしみこんでいた」。この情景は3年後に出た、ギaskell夫人 (Elizabeth Gaskell) の *Mary Barton* で再度描かれるものである。

These wretched tenements seldom consisted of more than two rooms, in one of which the whole family, however numerous, were obliged to sleep, without distinction of age, or sex, or suffering. With the water streaming down the walls, the light distinguished through the roof, with no hearth even in winter, the virtuous mother in the sacred pangs of childbirth, gives forth another victim to our thoughtless civilization; surrounded by three generations whose inevitable presence is more painful than her sufferings in that hour of travail; while the father of her coming child, in another corner of the sordid chamber, lies stricken by that typhus which his contaminating dwelling has breathed into his veins, and for whose next prey is perhaps destined, his new-born child, These swarming walls had neither windows nor doors sufficient to keep out the weather, or admit the sun or supply the means of ventilation; the humid and putrid roof of thatch exhaling malaria like all other decaying vegetable matter.⁴¹⁾

「あらゆる形の病熱、青白い肺病、消耗熱、体中ふるえるおこりに」に悩む人々に、「マーネーのホーリー・チャーチは聖なる使命を忘れてしまっている」、人々はシオンとかベテルとかベテスタとペンキで書かれた集会所にやってくる。そんな状況で、マーネーの教区に初めて付け火の松明が

持ち込まれたのだ。卿の農場の重要な稲むらが放火されて、周囲の支配者階級は不安を感じている。

隣接の、新興産業地帯のモウブレイ卿 (Lord de Mowbray) が、「おたくのまわりの連中はどうですか」と聞くのに対し、マーネー卿は自分の方は問題ない、という。「先日、放火騒ぎがあって、おびえた人もいましたがね。調べたところ、まったく偶然におこったことで、満足しています。少なくとも賃金とは関係ありませんよ」。⁴²⁾マーネー卿は農業労働者の賃金をどんどん下げた結果が、彼等を悲惨な状況に追いこんでいることに目をむけようとしな。チャールズの追求に対して、「百姓の一家は週7シリングで十分やっていけるんだ、8シリングもあれば恩の字なんだ」という。1834年ドーセットのトルパドル (Tolpuddle) で起こった、最初の農民争議を行ったといわれる人たちの給金でさえ8シリングだった。⁴³⁾

貧農からプロレタリアへとディズレーリは筆をうつす。彼の政治的重点は勿論こちらにある。マーネー卿の領地内に修道院の廃墟がある。そこでエグルモントは彼の後の運命を決定する3人の見知らぬ人物と遭遇する。会った場所がヘンリー八世によって破壊された中世の僧院であることも重要な意味を擁する。ディズレーリは英国の歴史をたつとびながら、実は常にその彼方の過去に目を向けているのである。

三人のうちの一人は、「人民の真友かつ闘士」⁴⁴⁾と呼ばれるウォルター・ジェラードであり、若い方の男はジャーナリストのスティーヴン・モーリー (Stephen Morley) である。モーリーと後にわかる、見知らぬ若者が、「都市では状況は悪化しています。人口過密はより厳しい生存競争 (a severer struggle for existence) を意味します」という。ダーウィン (C. Darwin) の *On the Origin of Species* は1859年に出版されたので、このフレーズが出てくる、チャールズ・ライエル (Charles Lyell) の *Principles of Geology* Vol. II (1832)

を作者は読んでいたと思われる。エグルモントが、「君がなんといおうと、われらが女王はこれまでなかった最大の国に君臨されていますよ」というのに対し、モーリーは「どちらの国か？女王は二つの国を治めているのだ」といって、続ける。

‘Yes,’ resumed the younger stranger after a moment's interval. ‘Two nations; between whom there is no intercourse and no sympathy; who are as ignorant of each other's habits, thoughts, and feelings, as if they were dwellers in different zones, or inhabitants of different planets; who are formed by a different breeding, are fed by a different food, are ordered by different manners, and are not governed by the same laws.’

‘You speak of ——’ said Egremont, hesitatingly.

‘THE RICH AND THE POOR.’⁴⁵⁾

この時である。太陽は沈み、頭上に宵の明星が燦いている。静寂の中で、「廃墟のマリア礼拝堂から聖母への夕べの讃歌が湧き上った。ただ一つの声であったが、この世のものとは思えない美しい歌であった。優しくかつ荘厳で、柔軟かつ震える声であった」。⁴⁶⁾この三人目の人物は、ジェラードの娘のシビル・ジェラード、題名になっているシビルその人である。この作品ではシドーニアは出てこないが、シビルが途中で登場し、事実上の主人公のコースを決定する点では、両者の役割は似たところがある。修道院を賛美するジェラード、そこでマリア賛歌を歌うシビルから推測できるように、この父子はカトリックである。

この後ジェラードとモーリーに従って、新興産業の町モウブレイが紹介される。土曜日なので町は人々でごった返している。ダンディ・ミック

(Dandy Mick) は16歳だ。母親は酒浸りで、朝5時から夜7時まで働き、ミックが赤ん坊の頃は黙らすためにアヘン入りの糖蜜を与えた。『メアリ・バートン』の6章にほぼ同じ記述がある。ミックはオーウェンの組織に入っている。親もとを離れて共同生活している娘たちが出てくる。次にデヴィルダスト (Devildust) が紹介される。母親たちは子供を生むと、2週間もすれば週3ペンス払って老婆に預けて働きに出る。赤子たちはアヘン入りの糖蜜を与えられ、多くが、最後にスパイス入りの甘味アヘンを飲まされて、静かに死ぬ。デヴィルダストはそれを生きのびた男で、「暗く、憂うつだが、野心的で不満であった。よく考え、天才がもつ我慢と堅忍の力をそなえていた」。「労働者の権利」について読みもし考えてもきた。「労働者は弱いかもしれないが、資本家はもっと弱い」⁴⁷⁾と言って、ストライキを提唱する。

次はウォーナー (Warner) という労働者である。職人であったのが、機械の導入で、機械の一部となって、超低賃金で働いている。「1時間1ペニーで、1日12時間働いている。しかもその労賃さえも抵当にとられている」。妻は重病で、食欲もないが、子供たちは夕食も与えられずベッドにやられているので、眠ることさえできない。ウォーナーは続ける。「それは資本家が人間の労働と技術の代りをする奴隷を見つけたからだ。かつては男は職人だった。今はただの機械の番だ。その仕事さえも男の手からすべりぬけて女子供にうつっている。資本家は栄えて巨万の富を蓄積している。俺たちはますます下へ下へ沈む。牛馬よりも下だ。だって、牛馬はおれたちより恵まれている。おれたちより面倒をみて貰ってるから。しかしそれも当然だ。今のシステムに従えば、牛馬の方が貴重だから。しかも連中は、資本と労働の利害は一致しているという」。⁴⁸⁾このウォーナー一家にシビルが慈善を施すことで、「神から送られた天使」⁴⁹⁾とあがめられている。

「心に刻印されたシビル・ジェラードの姿」⁵⁰⁾にかられて、彼女のいるモーブレイにエグルモントが現れるのは、この二、三日後である。「あの三人が平民 (The People) なら、彼らの中で生きたい！ 彼らの交わす言葉と比べれば、サロンのお喋りなどは屈辱的だ」⁵¹⁾と思う。「僧院の廃墟であるの三人にあって以来……社会問題を違った調子で見ようになった」⁵²⁾のである。街に入った彼は橋の上で偶然にウォルター・ジェラードに会う。『ダニエル・デロンダ』 (Daniel Deronda) でもそうであるが、橋の上で会うということは、意図的な象徴であることはいうまでもない。ジェラードは彼の家 (home) に案内する。エグルモントは、ジェラードと同居していたスティーブン・モーリーと同じジャーナリストで、名前を「フランクリン」 (Franklin) だと名乗る。ジェラードは「労働者階級の一人」として彼を迎える。

第三巻に入って、ディズレーリは産業都市の実態を描く。エグルモントはそれに呼応して労働階級を理解して行くが、それは彼が体験するのではなく、ある時は作者が語り手となって勝手に書いてゆくし、ある時はジャーナリストのモーリーが観察したものとして描く。とに角自分のいいたいことは書くのであって、小説の方法論は無視しているといっているだろう。

先ず炭坑で働いている女性労働者を描く。男が聞いてもぞっとするような、汚い言葉を吐いている娘たちである。「腰まで裸で、粗布のズボンをはいた両脚の間を、革のベルトにつないだ鉄の鎖が通っている。四つんばいになって、イギリスの娘が、1日に12時間、ときに16時間も、石炭を入れた立て桶を引いて、暗く、険しい、水の溜まった地下道を急いでいる。黒人奴隷廃止協会が見逃しているらしい実情なのだ」⁵³⁾という。作者の目は次に幼年労働者に向く。

See too these emerge from the bowels of

the earth! Infants of four and five years of age, many of them girls, pretty and still soft and timid; entrusted with the fulfilment of most responsible duties, and the nature of which entails on them the necessity of being the earliest to enter the mine and the latest to leave it. Their labour indeed is not severe, for that would be impossible, but it is passed in darkness and in solitude. They endure that punishment which philosophical philanthropy has invented for the direst criminals, and which those criminals deem more terrible than the death for which it is substituted. Hour after hour elapses, and all that reminds the infant Trappers of the world they have quitted and that which they have joined, is the passage of the coal-waggons for which they open the air-doors of the galleries, and on keeping which doors constantly closed, except at this moment of passage, the safety of the mine and the lives of the persons employed in it entirely depend.⁵⁴⁾

次はモーリーがカメラ・アイとなって、産業地帯の中核へ向ってゆく。

先ほどの坑夫たちが地上で話し合っている。「俺たちはトミーされて (tommied) 死んでしまうんだ」⁵⁵⁾とニクソン親父 (Master Nixon) がいう。'Tommy' とは、給料を物品で払う現物支給制度によって労働者に供給される物品ないしその店のことであり、それが動詞として使われている珍しい例である。OED ではこの文が唯一の例文である。その実体がウッドゲイト (Wodgate) の調査に行く途中のモーリーによって目撃される。ディグズ親子のトミー・ショップは週に一度しか開かれない。息子のジョゼフ (Joseph Diggs)

は特にサディスティックに坑夫たちの妻子を罵る。女や子供が品物を得るために何時間も並んでいる。「顔に暴虐と悪業の刻印を押された、背の低い、醜い犬」のこの男は、「最初の5分は客に悪態をつき、時にはカウンターから身をのり出して先頭の女たちに平手うちをくらわしたり、娘さんの髪を力まかせにひっぱったりする」。

'I was first, Master Joseph,' said a woman eagerly.

'No; I was,' said another.

'I was here,' said the first, 'as the clock struck four, and seated myself on the steps, because I must be home early; my husband is hurt in the knee.'

'If you were first, you shall be helped last,' said Master Joseph, 'to reward you for your pains!' and he began taking the orders of the other woman.

'O! Lord have mercy on me!' said the disappointed woman; 'and I got up in the middle of the night for this!'

'More fool you! And what you came for I am sure I don't know,' said Master Joseph; 'for you have a pretty long figure against you. I can tell you that.'

'I declare most solemnly —' said the woman.

'Don't make a brawling here,' said Master Joseph, 'or I'll jump over this here counter and knock you down, like nothing. What did you say, woman? are you deaf? what did you say? how much best tea do you want?'

'I don't want any, sir.'⁵⁶⁾

その上、普通の店の何倍もの値段で品物を与え、

それも不要のものを買わせたりする。この男が、坑夫たちの妻子でごった返す中に、カウンターから飛び込む。悲鳴が起って、男の子が死んだ、という叫び声が上る。奇妙なことに、その場に居合わせたモーリーは、群集に聞かれないところで、ブリッグズの親に、「民衆の圧迫者」と新聞に書くぞとおどし、まだ息のある男の子を二人で2階のベッドに寝かす。どういう取引をしたかは書かれていないが、後に起こるモーリーの裏切の伏線と考えられる。

モーリーが見聞するウドゲイトも奇妙な世界である。所有者もいないし、領地権を要求する者もないので、借地料なしに掘立小屋を建てることができた。教区もなければ、当然十分の一税もなく、干渉的な管理もない。しかも燃料はただで手に入った。それゆえ「このイングランドで最も醜い土地に人々が急速に集まってきた。一本の木も見えず、一輪の花もなく、鐘楼も尖塔もない。心を和らげ、精神を人間的にする風景も音もない」⁵⁷⁾のである。「都市自治体も、判事も、地方法令も、教会付属室も、学校もない。道は掃除されたこともない。自分の家だけ明かりをつけ、自分のことしか知らない」。大工場もない。しかし、こんな所を支配している貴族がいるのである。職工長たちで、弟子と称する者らをかかえ、これ以上のない圧政を行なっている。

They are ruthless tyrants; they habitually inflict upon their subjects punishments more grievous than the slave population of our colonies were ever visited with; not content with; beating them with sticks or flogging them with knotted ropes, they are in the habit of felling them with hammers, or cutting their heads open with a file or lock. The most usual punishment however, or rather stimulus to increase exertion, is

to pull an apprentice's ears till they run with blood.⁵⁸⁾

この若者たちは「1日16時間、いや20時間も働かせられる。親方から親方へ売られることもしばしばだ。食事は腐肉で、屋根裏か地下室で寝る」。不思議なことに、こんな親方なのに、「弟子」たちはある種の愛着をもっている。

親方のトップはビショップ(司教)と呼ばれている。たまたまモーリーが会った、タマス(Tummas)という若者の親方で、この地帯を仕切っている。一つしか名前をもっていないこの青年は額に深い切り傷がある。親方が錠前を投げつけたからだが、彼は常時金槌で頭をなぐられていたりしている。にもかかわらず、彼と同じく背骨の曲った女と結婚できたのもその親方のお蔭なのだ。「親方は焼網に塩をふりかけ、『主の祈り』を逆に読んで、ノートにわいらの名前を書いたんでさあ。それで一緒になりやした」。妻のいうところでは、「トマスは今は、うちの罪をあがなうために十字架にかけられた救世主のポンティウス・ピラトと、モーセと、ゴリアテ、それにあとの使徒を信じてんのさ」。ウドゲイトの事は、ディズレーリのフィクションではなく、「青書」から借りてきたものである。このような劣悪な状態で、産業革命時の労働者階級の平均寿命は、ジェラードのいうところでは17年である。⁵⁹⁾この状況の打開策として、革命の機運は高まっている。

一方、エグルモントとシビルはトラフォード氏(Mr. Trafford)の工場を訪問する。ここが、「2つの国」を一つの「国」にしている実例として、ディズレーリは呈示し、エグルモントが政界で行動してゆく指針とするのである。例によって作者は登場した時にその人物の善悪を外面より規定する。

With gentle blood in his veins, and old

English feelings, he imbibed, at an early period of his career, a correct conception of the relations which should subsist between the employer and the employed. He felt that between them there should be other ties than the payment and the receipt of wages.⁶⁰⁾

早速、子供のない遠い縁戚がトラフォードに遺産を残してくれて、「雇用者と被雇用者の間に賃金の受渡しをこえた結びつき」を作り出す事業に着手する。工場はすでに出来上がっている。「2エーカーに近い敷地に、2千人以上の労働者を収容できる、ワンルームの工場である。屋根は交差穹隆の (groined) アーチで、高さは18フィートの換気ドームで採光され、樋の役割もする空洞の鑄鉄製の柱で支えられていた」。⁶¹⁾これによって通風も、一定した室温も保たれていた。これはカーライルも主張し、*Shirley* でもムーアが行きつく工場でもある。'groin' は OED の初例が1812年なので、当時としては最新の技術であった。トラフォード氏は「家庭的な美德は家 (a home) にもとづくことをよく知っていて」、「あらゆる家族が家に住めるような村づくり」⁶²⁾をしてきた。その結果、「清潔と秩序」がつくり出され、トラフォード氏の共同社会では、犯罪はゼロであり、墮落者 (a reprobate character)⁶³⁾ もいない。男たちはいい服を身につけ、女たちの頬は輝いている。酒飲みは知られず、女性の道徳は高められている。

The vast form of the spreading factory, the roofs and gardens of the village, the Tudor chimneys of the house of Trafford, the spire of the gothic church, with the sparkling river and the sylvan background, came rather suddenly on the sight of Egremont. They were indeed in the

pretty village-street before he was aware he was about to enter it. Some beautiful children rushed out of a cottage and flew to Sybil, crying out, 'the queen, the queen;' one clinging to her dress, another seizing her arm, and a third, too small to struggle, pouting out its lips to be embraced.⁶⁴⁾

トラフォード氏もカトリック教徒で、シビルの父はこの会社の工場監督官をつとめている。

ディズレーリは、ここまで「二つの国」と、それを一つにする企画を描いてきた。いよいよ登場人物すべてを結びつけて、大団円へ向かう。その結節点がチャーティスト運動である。

あの伊達者ミック (Dandy Mick) も、デヴィルズダストのすすめで、ジェラードやモーリーも見守る「松明集会」で労働組合 (Trades Union) の一員であると認められた。Trades-Union の OED の初例が1831年であるので、この作品の出た時では秘密結社の趣があっただろう。「偉方をこらしめ、圧制し暴虐をほしいままにした親方を暗殺し、組合が救い難いと認定する、あらゆる工場、作業所、商店を破壊すること」⁶⁵⁾をミックは誓う。

1839年、ジェラードとモーリーはチャーティスト請願の代表としてロンドンに赴く。そのためにジェラードは家を手放し、トラフォードの職を捨てる。チャーティスト大会で決った人民憲章を議会で通過してくれるよう、議員の一人一人に請願してまわるのだが、成果は上らない。その日の最後に彼らを迎えたのは、ジャーナリストでフランクリンと名乗っていた、エグルモントであった。暴君マーニー卿の弟で貴族、「人民の敵」であったのだ。

エグルモント、ジェラード、モーリーの考えは第3巻9章で示されている。

The evening passed in various conversation, though it led frequently to the staple subject of talk beneath the roof of Gerard — the Condition of the People. What Morley had seen in his recent excursion afforded materials for many comments.

'The domestic feeling is fast vanishing among the working classes of this country,' said Gerard; 'nor is it wonderful — the Home no longer exists.'

'But there are means of reviving it,' said Egremont; 'we have witnessed them today. Give men homes, and they will have soft and homely notions. If all men acted like Mr Trafford, the condition of the people would be changed.'

'But all men will not act like Mr Trafford,' said Morley. 'It requires a sacrifice of self which cannot be expected, which is unnatural. It is not individual influence that can renovate society; it is some new principle that must reconstruct it. You lament the expiring idea of Home. It would not be expiring, if it were worth retaining. The domestic principle has fulfilled its purpose. The irresistible law of progress demands that another should be developed. It will come; you may advance or retard, but you cannot prevent it. It will work out like the development of organic nature. In the present state of civilization and with the scientific means of happiness at our command, the notion of home should be obsolete. Home is a barbarous idea; the method of a rude age; home is isolation; therefore anti-social. What we want is Community.'

'It is all vary fine,' said Gerard, 'and I

dare say you are right, Stephen; but I like stretching my feet on my own hearth.'⁶⁶

「人民の情況 (the Condition of the People)」は、カーライルの *Chartism* の第1章 'Condition-of-England Question' と、'the People's Charter' から造られた言葉と考えられる。この小説がいわゆる英国状況小説 (the Condition of England novel) に入るのは、当時のイギリスの情況問題に対する答えを模索しているからである。ディズレーリの答えは、結論で述べることになるだろう。

ジェラードが英国の労働者階級ではもはや家 (The Home) なるものが存在しない、と嘆くのに對し、エグルモンは、彼らに家を与えれば、優しい家庭的な気持ちをもつようになるだろう。すべての人がトラフォード氏のようにふるまえば、人民の情況は変わるだろう、という。エグルモンの鑑はトラフォード氏であり、その程度の考えしかもっていないのである。

この二人に對し、モーリーの考えは対照的である。彼らの情緒的な考えと比べると、情況の觀察と分析がはるかに緻密であり、マルクス主義に一步踏み込んでいる。

シビルは、チャーティスト代表會議にモーブレイ代表として派遣された父と共にロンドンに来ている。ジェラードとモーリーが、フランクリンの正体がエグルモンと知った翌日、彼女とエグルモンは全く偶然に出会う。最初の出会いが修道院廢墟であったのに對し、今回はウェストミンスター・アビーである。カトリック廢墟から英国々教会の総本山ともいべきウェストミンスター・アビーに場が移されたのは、勿論偶然ではない。ジェラードから、エグルモンがマーネー卿の弟と知らされ、「金持と貧乏人の間の淵は絶対に越えられない」⁶⁷という。その時にモーリーがハットン (Baptist Hatton) を連れて入ってきて、ジェラードはハットンからモーブレイ城を繼承す

る貴族だが、法律的に証明する文書が見つからないと知らされる。ハットンがジェラードに尽力するのは、シビルの魅力によるのが第一だが、更に大なる理由かもしれないことは、三人ともカトリックであり、英国に大カトリック教会を建立してくれることを望んでいるからである。

次の日エグルモントは再びシビルの前に現れ、彼女の「偏見」を解くように懇願する。「現存の世界は君が本で読んだ世界じゃない。君らに優越しているという階級は、君らの父祖の時に支配していたのと同じじゃないんだ」といって、自分はその変化に率先して参加していると説くのに対し、シビルは、それは人民がある程度自らの力を知ったからだという。エグルモントがそれに答える。

'Ah! dismiss from your mind those fallacious fancies,' said Egremont. 'The People are not strong; the People never can be strong. Their attempts at self-vindication will end only in their suffering and confusion. It is civilisation that has effected, this is effecting this change. It is that increased knowledge of themselves that teaches the educated their social duties. There is a dayspring in the history of this nation which those who are on the mountain tops as yet perhaps only recognize. You deem you are in darkness, and I see a dawn. The new generation of the aristocracy of England are not tyrants, not oppressors, Sybil, as you persist in believing. Their intelligence, better than that, their hearts are open to the responsibility of their position. But the work that is before them is no holiday-work. It is not the fever of superficial impulse that can remove the deep-fixed barriers of centuries of ignorance and

crime. Enough that their sympathies are awakened; time and thought will bring the rest. They are the natural leaders of the People, Sybil; believe me they are the only ones.'⁷⁶⁸

「人民」が聞くと、憤激する言葉であろう。これがエグルモントを通じて語るディズレーリの声であることは、『コニングズビー』からの流れで明白である。「人民が自らの力を知ったからだ」というシビルの考えを、「誤った空想」だという。「人民は強くない」ということは真実だろうが、「人民は決して強くなれない」というのは本当だろうか。「民の自己擁護はただ苦しみと混乱で終るだろう」という。そうかもしれないが、「ただ」(only) といえるだろうか。「この変化を実現しつつあり、実現してきたのは文明だ」という、「文明」(civilisation) とは一体何を指しているのだろうか。社会的義務を学んだ教養人のことらしい。その人たちは頂上において、国の歴史の黎明を見ることが出来る。人民の君は闇において、貴族の僕には来光が見える、という。「英国貴族の新世代は暴君ではない、圧政者ではない」という、その「英国貴族の新世代」とは、まさに「青年英国党」以外の何ものでもない。彼らの心は自らの地位に伴う責任を自覚している。自分らの仕事はお遊び仕事 (holiday-work) じゃない。皮層的な衝動の熱病じゃない、という。裏返せば、チャーティスト運動は「お遊び仕事」で、「うすっぺらな衝動の熱病」となってしまう。彼らの同情は目覚めた。「彼らこそ生まれながらの人民の指導者なんだよ、シビル。信じてくれ給え、彼らだけが指導者なんだよ」

シビルは、「人民の指導者は人民が信用する人たちです」とやり返すのだが、「その連中は人民を裏切るかもしれないよ」とエグルモントは答える。裏切りや分派闘争については、モーリーもチャー

ティスト運動から距離をおく理由として、シビルに言っていた。ディズレーリがこの線にそって小説をすすめて行くことが表白されているととっていいであろう。

この後エグルモンはシビルに求婚する。シビルは動揺するが、間をおいて叫ぶ。「一体これって何なの？ 貴族の子息と人民の娘の結婚！」今回は結局断る。「深淵は越えれませんわ」。⁶⁹⁾

チャーティストの嘆願は結局議会で拒否され、それ以後、人民憲章を重視するためには暴力(physical force)に訴えるべきだという勢力が運動体の中で力をもってくる。「通常少数だが決意を固めた男たちから成る暴力派が勝った。パーミンガム暴動は無謀な協議の最初の結果だった。これに続く何年間はこの国の労働者階級に苦しみと破滅をもたらすことになるのだ」⁷⁰⁾と作者は書く。父親も加担しているらしいと思うシビルは、エグルモンに傾いてゆく。

Yes! there was one voice that had sounded in that proud Parliament, that free from the slang of faction, had dared to express immortal truths; the voice of a noble, who without being a demagogue, had upheld the popular cause; had pronounced his conviction that the rights of labour were as sacred as those of property; that if a difference were to be established, the interests of the living wealth ought to be preferred; who had declared that the social happiness of the millions should be the first object of a statesman, and that if that were not achieved, thrones and dominions, the pomp and power of courts and empires, were alike worthless.⁷¹⁾

「感動し、頬を輝かせ、涙をうかべて、エグルモ

ントの演説を読んで」⁷²⁾いる彼女の前に、その演説をした本人が立っていた。「イギリス政治の本来の原則は平等原則ではないのです。特権に反対するのではなく、特権を拡張する原則なのです。少数を平等にするのではなく、多数を向上することによって、結果的に平等を達成する原則なんです」⁷³⁾とエグルモンはシビルを説得する。

「もしすべてが変わってしまったらどうなるでしょうか」と、彼女自身が変わって、父親にいう。「人民は規律正しくはないのです。彼らの行為には理路もなければ慣性もないのです。お父さんが巻き込まれているのは暴動であって、革命じゃないのです。お父さんは被害者であって、犠牲者じゃないのです」。⁷⁴⁾それではシビルのいう「革命」とはどのようなものなのか。例によってディズレーリは大事なことは一切説明しない。

この後モーリーが来て、シビルが愛してくれるなら、ジェラードを助けるという。返事をしふるシビルに、それならエグルモンに手も心も与えないことを誓えというが、シビルは肯わない。

長々と語ってきた作者は、最後の2章で一挙にすべてを結ぶ。

ウッドゲイトのあの「ビショップ」が部下の「地獄猫」(Hell-cats)を引きつれ、1800から2000人がモーブレイ・カースルに来る。彼らと共に、モーリーもデビルズダスト、ダンディ・ミックと屈強な若者たちを連れてやってくる。シビルもレイディ・ド・モーブレイの好意で避難してきている。当初ビショップ達はビールをふるまわれてすぐに引き揚げるようにみえたが、彼らは城に侵入し、地下の酒をのみ、破壊を始める。モーリーは城の「円塔」内にある、記録保管室へ行く。女子供を避難させるために、シビルは残って、モーブレイの顔見知りの助けで、暴徒(the mob)を防ぐ。牧師のスト・リースが救助に来る。例のウォーナーと彼の友人たちが暴徒を防いでいる間に、レイディ・ド・モーブレイや娘たちは川に出る地下

道（グロット）に逃れる。全員が無事グロットに入って鉄扉が締められたとき、シビルと少数はとり残されてしまう。地下のセラーでは、タマスはバーガンディを、ニクソン親方はトカイを、ビッシュォップを先頭に、地獄猫たちは高級ワインをがぶ飲みして、拳句に酔いつぶれている。モーリーは遂に目指したものを見つける。シビルがモーブレイの真の継承者であり、最も古い貴族の一人であることを証明する証書である。この時、階下でマスケット銃の発射音がする。

いよいよディズレーリの処刑が始まる。やって来たのは、義勇農騎兵団をひきいたエグルモントである。脱出不可能と見たモーリーは、ミックが塔から飛び降りることを命じ、気を失ったミックに文書の入った箱を投げ落す。ミックはそれを命令通りにシビルに手渡すことになる。モーリーはピストルで騎兵団の隊長をエグルモントであることを知ってか知らずか撃とうとする。もちろん、兵の一人によってその前に射殺される。死ぬ前にエグルモントにいう。「ぼくらは会った時からライヴァルだった。君の星がぼくの星を支配してきた。今ぼくは君の繁栄と名誉のために命と名声を犠牲にしたと感じている」。⁷⁵⁾最後にシビルの名を呼んで息絶える。

一方、エグルモントの兄のマーネー卿はどうかというと、ジェラードの指揮で平和裡に集結している民衆を銃とサーベルで蹴ちらしている。ジェラードが兵の一人を叩き伏せ、抗戦をうったえたとき、この「人民の真友で擁護者」は射殺される。怒った民衆は、マーネー卿に投石して、「文字通り石を投げて殺した」。⁷⁶⁾

ビッシュォップ以下ヘルキャッツたちも焼死する。

Whether from heedlessness or from insane intention, for the deed sealed their own doom, the drunken Hell-cats brandishing their torches, while they rifled the

cellars and examined every closet and corner of the offices, had set fire to the lower part of the building, and the flames that had for some time burnt unseen, had now gained the principal chambers. The Bishop was lying senseless in the main cellar, surrounded by his chief officers in the same state: indeed the whole of the basement was covered with the recumbent figures of Hell-cats, as black and thick as torpid flies during the last days of their career. The funeral pile of children of Woden was a sumptuous one; it was prepared and lighted by themselves; and the flame that, rising from the keep of Mowbray, announced to the startled country that in a short hour the splendid mimicry of Norman rule would cease to exist, told also the pitiless fate of the ruthless savage, who, with analogous pretension, had presumed to style himself the Liberator of the People.⁷⁷⁾

「人民の解放者」と名乗っていた男をこのように辱しめるとは。いやしくも労働者ではないか。それを「地獄猫」と呼び、あまつさえ蠅にたとえるとは。作者の労働者観は、たとえ彼らがならず者——そのように書いているのも作者——としても、語るに落ちる範囲を越えている。あの明晰に労働者階級の状況を分析できたモーリーを本来の方向に発展させずに、かくも卑劣化するとは。

孤立したシビルを守るのはハロルドという名の犬しかいない。「突然酔っぱらった一団のならず者が叫び声をあげ、みだらな言葉を吐き散らして彼女をとり囲んだ」。ハロルドも負傷する。

One ruffian had grasped the arm of Sybil,

another had clenched her garments, when an officer covered with dust and gore, saber in hand, jumped from the terrace, and hurried to the rescue. He cut down one man, thrust away another, and placing his left arm round Sybil, he defended her with his sword, while Harold now become furious, flew from man to man, and protected her on the other side. Her assailants were routed, they made a staggering flight; the officer turned round and pressed Sybil to his heart.

'We will never part again,' said Egremont.

'Never,' murmured Sybil.⁷⁸⁾

「ぼくらは二度と別れませんよ」とエグルモントがいった。「絶対に」とシビルはささやいた。——都合の悪いものは消して、シビルを裕福な貴族にし、エグルモントの兄も消して、全英で三番目の金持にして、両者を結婚させることは、あまりに見え見えではないか。

この章につぐ短い終章で、論功行賞が行なわれる。章は、前章の事件より1年後、エグルモントとシビルが新婚旅行でイタリアで1年ほど過ごして、帰国したところから始まる。二人はパーマーソンなど政界の頂点をしめる人達のパーティに招かれていることが紹介される。シビルはモーブレイの真の継承者になっているので、モーブレイ卿も消さねばならない。城の焼失の消心のあまり死んだと噂で知らされる。

伊達者ミックは文書箱を決死的にシビルに運んだことで——「人民の権利の擁護」も功績に付加されて——今はマーネー卿となったエグルモントによって実業家にして貰う。彼はデヴィルズダストをパートナーに選び、後者はモーブレイと改名して、「ラドレー・モーブレイ会社」を運営する

「資本家」になり、将来は国会議員になるだろうと書かれる。ミックの周りにいた女工たちと二人はそれぞれ結婚する。

本論文のタイトルは、「ディズレーリ三部作におけるユダヤ主義について」である。三部作の第二作にあたる『シビル』を詳しく紹介したが、そこにはシドーニアも、ユダヤという言葉も出てこなかった。では、なぜこのタイトルで扱ったか、を説明してこの章を終えよう。

結論を先にいえば、『シビル』は『コニングズビー』のアイデアを忠実に継承したものだからである。承前しつつ補完したのがこの作品と考えてよいであろう。最終章で作者自身がまとめてくれている。

A year ago, I presumed to offer to the public some volumes that aimed to call their attention to the state of our political parties; their origin, their history, their present position. In an age of political infidelity, of mean passions and petty thoughts, I would have impressed upon the rising race not to despair, but to seek in a right understanding of the history of their country and in the energies of heroic youth — the elements of national welfare.⁷⁹⁾

1年前に出版したものといえば、もちろん『コニングズビー』のことである。「政党の情勢」に注意をひくため、かつ、「国家繁栄の原則をこの国の歴史を正しく理解し、英雄的な青年たちの力に求めるよう」に書いたという。「青年英国党」のプロパガンダといってよいであろう。そのアイデアの基本はシドーニアによってコニングズビーに与えられたものであった。従って、ユダヤ主義のベクトルをもつものであった。

これに対し、『シビル』は、同じ意図を一步進

めたものという。「国民の思考を、党の状態から、党が2世紀の間支配してきた人民の状態へと向ける」ことが目的なのである。

The comprehension and the cure of this greater theme depend upon the same agencies as the first: it is the past alone that can explain the present, and it is youth that alone can mould the remedial future. The written history of our country for the last ten reigns has been a mere phantasma; giving to the origin and consequence of public transactions a character and colour in every respect dissimilar with their natural form and hue. In this mighty mystery all thoughts and things have assumed an aspect and title contrary to their real quality and style: Oligarchy has been called Liberty; an exclusive Priesthood has been christened a National Church; Sovereignty has been the title of something that has had no dominion, while absolute power has been wielded by those who profess themselves the servants of the People. In the selfish strife of factions two great existences have been blotted out of the history of England—the Monarch and the Multitude; as the power of the Crown has diminished, the privileges of the People have disappeared; till at length the sceptre has become a pageant, and its subject has degenerated again into a serf.⁸⁰⁾

「このより大きなテーマ（人民の状態）の理解と治療は最初と同じ力にかかっている」という。「the same agencies as the first」というのは、先の引用にある「the energies of heroic youth」を

指す。即ち、ここでも「青年英国党」をプロパガンダしているのである。「寡頭制は自由と呼ばれてきた。排他的聖職制が国家の教会という洗礼名を与えられてきた。君主制は領土をもたないものへの虚名となってきた」——これはシドーニアが言ったことである。それも当然、シドーニアのモデルの半分はディズレーリその人がモデルなのであるから。政党政治によって、「王の力と人民の特権」はないがしろにされてきた、その治癒は青年英国党によってのみ可能というのである。

That we may live to see England once more possess a free Monarchy and a privileged and prosperous People, is my prayer; that these great consequences can only be brought about by the energy and devotion of our Youth is my persuasion. We live in an age when to be young and to be indifferent can be no longer synonymous. We must prepare for the coming hour. The claims of the Future are represented by suffering millions; and the Youth of a Nation are the trustees of Posterity.⁸¹⁾

Sybil or The Two Nations はこのパラフレイズで終る。『コニングズビー』で、コニングズビーとイーディスの結婚で、貴族と大資本の結合によって一つの問題を解決した。『シビル』では、エグルモントとシビルの結婚で、貴族と労働者階級の結合によって、「二つの国」は一つの国になった。シドーニアがコニングズビーにマンチェスターへ行けと言ったとき、この二つの解決法は含意されていたのである。しかし、シドーニアもディズレーリも決して労働者を認めたわけではない。シビルが最も由緒ある貴族の末裔であると判明するのは、労働者ながら生まれつき高貴だという親子の描写から、初めからプロットに入っていたことは明ら

かである。何よりも、「地獄猫」やモーリーの扱いにおいて明白だ。いかにして「地獄猫」になったかに一切触れない。彼らも「青書」に出てくる、れっきとした労働者なのだ。最もすぐれた労働者側の理論派であるモーリーを、私利のために、エグルモントを暗殺しようとするとか、秘密集会を官憲に密告する、汚ない卑怯者にするところに、労働者への裏切者は作者自身であることが見てとれるだろう。

宗教に対する作者の態度は更に微妙である。ジェラード、シビル、ハットンがカトリックに属していることは先に述べた。当時、主人公をカトリックと明示するのは勇気がいった。オックスフォード運動と『シビル』の時代は重なる。英国教会の主教たちは、この運動をローマ・カトリックへの改宗を促すものとして激しく攻撃した。この作品より4年後に出た『シャーリィ』(Shirley)では、シャーロット・ブロンテもこの運動への嫌悪を示している。『シビル』出版の直後、1845年にニューマン(Newman)はローマ・カトリックに改宗している。そのような時勢にどうしてディズレーリはシビル達をあえてカトリックにしたのだろうか。カトリック教徒解放とユダヤ教徒解放が連動している面もあったろうが、作品ではユダヤ教の優越性を示唆するために使われていると思われる。作者を代弁するのは、新しくモーブレイにきた、司祭のオーブリ・セント・リース(Aubry St Lys)である。

最低生活さえも保証しない低賃金を科すマーネー卿に食ってかかるのもセント・リースである。彼はエグルモントにいう。「教会が悪いんだ。教会は人民を捨てました。その瞬間から教会は危機におちいり、民衆は墮落したのです。昔は宗教が人間性の高尚な願望を満たす責任を果たしました。宗教的祝祭が疲れた心から労苦を開放したのです」。⁸²⁾儀式や祭礼を重んじる司祭にエグルモントが「この国の人々は儀式(forms and ceremo-

nies)を奴隷化する迷信および外国支配と結びつけて考えます」という。「ローマですね。しかし儀式はローマの前からありましたよ」と司祭がいう。エグルモントはこれに対し核心をつく質問をする。「しかし実際に、今日われわれの礼拝の中に儀式を復活すれば、この国にカトリック制を復興することになるのではないですか？」セント・リースは答える。

'It is difficult to ascertain what may be the practical effect of certain circumstances among the uninformed,' said Mr St Lys. The church of Rome is to be respected as the only Hebræochristian church extant; all other churches established by the Hebrew apostles have disappeared, but Rome remains; and we must never permit the exaggerated position which it assumed in the middle centuries to make us forget its early and apostolical character, when it was fresh from Palestine and as it were fragrant from Paradise.⁸³⁾

セント・リースはトラクテアリアンではないのである。ディズレーリが時に隠れユダヤ教徒といわれるように、この英国教会牧師も隠れユダヤ教徒かもしれない。次の彼の言葉を聞けば、そう思わないであろうか。

'In all these church discussions, we are apt to forget that the second Testament is avowedly only a supplement. Jehovah-Jesus came to complete the "law and the prophets." Christianity is completed Judaism, or it is nothing. Christianity is incomprehensible without Judaism, as Judaism is incomplete; without Christianity.⁸⁴⁾

この考えはまさに次作『タンクレッド』のテーマとなるのである。

IV. 『タンクレッド』 (*Tancred or The New Crusade*)

ディズレーリは「青年英国党」三部作を計画したとき、第1部は政党を、第2部は人民の状況を、第3部は教会を扱うと明言していた。第一は『コニングズビー』で、第二は『シビル』で果した。第三は『タンクレッド』で扱われる。『コニングズビー』は1844年に、『シビル』は1845年に出版され、予定では『タンクレッド』は1846年に上梓することになっていたが、1846年の政争のために、1847年の三月に世に現われた。

遅れたのは、単に政治面の忙殺が理由ではなかったと思う。『コニングズビー』で高らかに謳いあげられた「青年英国党」は、次作『シビル』では前面に出て華やかに活動することはなかった。実情は、「英国青年党」は崩壊の寸前であったからである。その原因は、つきつめれば、ディズレーリと他の青年貴族とは思想の本質を異にしていたからといえよう。『タンクレッド』で、前二作の主だった登場人物たちが再登場するが、脇役以下の存在といえよう。この作品で三部作を総合する意味で彼らは言及されているものの、この作品のテーマには必要とされなかったのが真実である。ただ、ディズレーリにとっては、初めから明確に構想していたと思われる。1849年5月に、『コニングズビー』5版の序文で、ディズレーリは次のように述べている。

In asserting the paramount character of the ecclesiastical polity and the majesty of the theocratic principle, it became necessary to ascend to the origin of the Christian Church, and to meet in a spirit worthy of a critical and comparatively enlightened age, the position of the descendants of that race who were the founders of

Christianity. Modern Jews had long laboured under the odium and stigma of mediæval malevolence. In the dark ages, when history was unknown, the passions of societies, undisturbed by traditionary experience, were strong, and their convictions, unmitigated by criticism, were necessarily fanatical. The Jews were looked upon in the middle ages as an accursed race, the enemies of God and man, the especial foes of Christianity. No one in those days paused to reflect that Christianity was founded by the Jews; that its Divine Author, in his human capacity, was a descendant of King David; that his doctrines avowedly were the completion, not the change, of Judaism; that Apostles and the Evangelists, whose names men daily invoked, and whose volumes they embraced with reverence, were all Jews; that the infallible throne of Rome itself was established by a Jew; and that a Jew was the founder of the Christian Churches of Asia.⁸⁵⁾

ディズレーリのこの主張を小説化したものが『タンクレッドあるいは新十字軍』である。

この作品の舞台は二つに分れる。第一はイギリスで、作品の三分の一をしめる。ベラモント公爵の一人息子のタンクレッドは両親の愛を一身にうけて成年を迎え、盛大な祝賀会が開かれる。両親は国会議員になることを薦めるが、聖墓 (the Holy Sepulchre) への巡礼の旅に出たいという。

‘Yes, sir, the Holy Sepulchre,’ repeated Lord Montacute, and now speaking with his accustomed repose. ‘When I remember

that the Creator, since light sprang out of darkness, has deigned to reveal Himself to His creature only in one land, that in that land He assumed a manly form, and met a human death, I feel persuaded that the country sanctified by such intercourse and such events must be endowed with marvellous and peculiar qualities, which man may not in all ages be competent to penetrate, but which, nevertheless, at all times exercise an irresistible influence upon his destiny. It is these qualities that many times drew Europe to Asia during the middle centuries.⁸⁶⁾

母親は直ちに最良の主教——ロンドン主教ブロムフィールド (Blomfield) がモデル——を呼んで、タンクレッドのエルサレム行きを止めてくれるように頼む。「彼は導くことのできない指導者の一人だった。……この男は困った状態になるといつも同じ結末になった——妥協だ」と作者は書く。「マンチェスターに主教がすぐに就任する」からというのがこの人物の説得だったが、タンクレッドは、(主教じゃなくて)「マンチェスターで天使をみたいのです」と答える。

主教が失敗したので、友人の世慣れたエスクデイル卿 (Lord Eskdale) に依頼する。反対するより遅延によって、意欲をそぐのが彼の作戦だったので、タンクレッドに海路到達のためのヨットを探させ、一方で、ロンドンの社交界に引き入れて、女性の誘惑に任せる。レイディ・コンスタンス (Lady Constance) に魅了されて、エルサレム行きを忘れかけていたタンクレッドに、『混沌の啓示』(The Revelations of Chaos) なる本を読むようにすすめる。ダーウィンも誉めた「発展理論」を展開した本で、タンクレッドは、「自分は過去に魚であったなんて信じない」といって、

この女性から離れる。モーリーの時もそうであったが、ディズレーリは進化論を認めない。

タンクレッドはエクステイルに東方をよく知っている人を紹介してくれるように頼む。シティの‘Sequin Court’に住むシドーニア (Sidonia) を推薦する。‘Sequin’はユダヤ人が取引した古金貨の名前だが、ロスチャイルドの住む‘New Court, St Swithin's Lane’の‘New’に変えただけで、シドーニアがロスチャイルドに極めて近い人間であることがわかる。

タンクレッドはシオンに発つ前にもう一つ女性の魅力に屈しかかる。釈迦が解脱する前に女性に襲われるように、宗教的な一つのパターンなのであろう。人妻のレイディ・パーティ・ベレア (Lady Bertie and Bellair) という女性だが、シドーニアから、彼女が「ヨーロッパで最も常習的な女ギャングラー」であり、今は鉄道に投資していることを知る。鉄道で中近東へ出る計画は独仏で進められていたものであり、英国が海路で中近東へアプローチする路線と対立していた。当時の国際事情を反映しているといえよう。

それが20世紀に入ると新興勢力のドイツがこの争いに参加して、事態はさらに複雑になった。当時イギリスのエジプト総督だったキッチナーは、独仏の支援を受けたトルコの南下に備えるため緩衝地帯としてパレスチナにイギリスの属国をつくる必要がある、と訴えている。パレスチナは古来、それ自身の重要さはあまりないが、アジア、アフリカ、ヨーロッパの三大陸を結ぶ陸橋として重視されていた。三大国の進出はパレスチナを昔と同じ状況においたのである。

こうした大国の思惑は、中東の鉄道建設で火花を散らした。当時、鉄道は第一級の戦略施設だったのである。だから、どの国がトルコ帝国内のどこに鉄道を建設するかは重要な

問題だった。当初、ドイツはコンスタンチノープルからペルシャ湾に至る鉄道建設案を出した。これはペルシャ湾岸におけるイギリスの権益を侵すうえ、英仏両国の鉄道建設案とぶつかる。結局、ドイツはダマスカスとメッカを結ぶヘジャズ鉄道を建設した。これが第一次大戦中、アラビアのロレンスがベドウィンを集めて攻撃する鉄道である。⁸⁷⁾

この情報を得た次の日にタンクレッドは、シドーニアの紹介状を手に中近東へ出発する。紹介状の相手が、シドーニアの支配圏と共に、タンクレッドの中近東での活動範囲と方向性を示している。一つはアロンゾ・ラーラ (Alonzo Lara, Spanish Prior, at the Convent of Terra Santa at Jerusalem) であり、今一つはアダム・ベッソー (Adam Besso at Jerusalem) である。シドーニアがなぜこういう人物を紹介するかは、タンクレッドとの会話に示されている。彼がエルサレムへ行く理由を述べると、シドーニアは、「あなたが望んでいるのは、偉大なアジアの神秘を究めたいということ (to penetrate the great Asian mystery) のようですね」という。先の引用にあるように、‘penetrate’はタンクレッドが父親にエルサレムへ行きたいといったときに使った言葉である。これに熱っぽくタンクレッドが、「あなたはわたしの内奥の思いにふれられました」とこたえる。若者が「アジアの神秘」を究めるのに必要と考える人物がこの二人である。端的に言えば、前者は精神、後者は資金など世俗の導師なのである。シドーニアはアロンゾ・ラーラについてタンクレッドに語る。

He calls me cousin; he is a Nuevo of the fourteenth century. Very orthodox; but the love of the old land and the old language have come out in him, as they will,

though his blood is no longer clear, but has been modified by many Gothic intermarriages, which was never our case. We are pure Sephardim. Lara thoroughly comprehends Palestine and all that pertains to it. He has been there a quarter of a century, and might have been Archbishop of Seville. You see, he is master of the old as well as the new learning; this is very important; they often explain each other. Your bishops here know nothing about these things. How can they? A few centuries back they were tattooed savages. This is the advantage which Rome has over you, and which you never can understand. That Church was founded by a Hebrew, and the magnetic influence lingers... Trust me, there is something deeper in it. I shall give you a note to Lara; cultivate him, he is the man you want. You will want others; they will come; but Lara has the first key.⁷⁸⁸⁾

引用に出てくる 'Nuevo' とは、'nuevo cristiano' 即ち、キリスト教に改宗したユダヤ人のことである。'We are pure Sephardim.' とシドーニアがいうとき、自分たちは純血のセファルディ、即ちスペイン・ポルトガル系ユダヤ人だ、という意味である。ラーラの家系はセファルディであるが、雑婚によって純粋でなくなっている。そのかわり、ラーラは 'master of the old as well as the new learning' だという。'the old learning' とは即ちユダヤ教の知識であり、'the new learning' とはその後のキリスト教の知識を指す。「2、3世紀前は君らの主教たちは刺青をした野蛮人だった」というとき、シドーニアの激しい差別意識が出ているが、これは基本的にはディズレーリが繰り返してきてきたことの感情的表現に過ぎない。シドー

ニアは、ラーラがユダヤ教とキリスト教を統合した人間と捉え、タンクレッドに目標を具体的に指示したと考えてよい。小説の流れも、主人公の以後も、この指示を具現してゆく過程と見える。

タンクレッドが英国を去る前に、シドーニアが晩餐会を開く。そこには『コニングズビー』と『シビル』に登場した「青年英国党」の連中が夫妻揃って招待されている。彼らはタンクレッドを応援するが、今やコニングズビーもシビルもまったく生彩を失っている。シェイクスピア的に前作の人物を瞥見させる程度である。彼らがシドーニアのパーティに参加しているということは、シドーニアのパーティ（一党）であることであり、シドーニアの支配下にあることを意味している。そこでぶつシドーニアの演説は、ディズレーリの考えと軌を一にしている。——シドーニアのモデルの半ばはディズレーリなのだから当然だが。

'And when a superior race, with a superior idea to work and order, advances, its state will be progressive, and we shall, perhaps, follow the example of the desolate countries. All is race; there is no other truth.'⁷⁸⁹⁾

「人種が全てである」という考えは、『コニングズビー』でシドーニアは既に述べていた。そして、ユダヤ民族が最高だ、というとき、一世紀後にヒトラーが、ユダヤ人を圧迫して、ゲルマン人こそ最高といったのと似ているのに驚く。

タンクレッドはいよいよパレスティナの地へ、「偉大なるアジアの神秘」を極めるためにやってくる。最初にゲッセマネを訪れ、帰途ベタニア近くの庭でまどろむ。目が覚めたとき、美しい娘が立っている。これがエヴァ (Eva)、シドーニアが依頼状を宛てた銀行家のベッソーの娘である。小説だからといえればそれまでだが、エヴァは流暢

な英語を話し、見知らぬ者同志の彼らは早速テーマに入る会話をする。

‘Pray, are you of those Franks who worship a Jewess; or of those other who revile her, break her images, and blaspheme her pictures?’

‘I venerate, though I do not adore, the mother of God,’ said Tancred, with emotion.

‘Ah! the mother of Jesus!’ said his companion. ‘He is your God. He lived much in this village. He was a great man, but he was a Jew; and you worship him.’

‘And you do not worship him?’ said Tancred, looking up to her with an inquiring glance, and with a reddening cheek.

‘It sometimes seems to me that I ought,’ said the lady, ‘for I am of his race, and you should sympathise with your race.’

‘You are, then, a Hebrew?’

‘I am of the same blood as Mary whom you venerate, but do not adore.’⁹⁰⁾

二人はこの後9頁に渡って、ユダヤ教とキリスト教をめぐる会話が続けるが、エヴァは忽然と姿を消す。

次に紹介されるのが、ベッソー夫妻にエヴァと共に育てられた孤児のファクルディーン (Fakredeem) である。エヴァよりも三歳上のレヴァノンの首長で、その野心はレヴァノンの君主になるか、東方を征服してオリエントの諸民族 (the Oriental races) の独立を勝ちとるか、でゆれている。ディズレーリの作品では、フラット・キャラクターが多いのだが、この人物はラウンド・キャラクターに入るだろう。暴力か詐欺が彼の生き方だけれど、心を許す相手にはなんでも喋る。

タンクレッドが中近東で出会う重要な人物はこの二人である。『タンクレッド』の人間関係の構造は、『シビル』と似ている。シビルを中心にエグルモントとモーリー、シビルの父親ジェラード、それに司祭のスント・リースという、『シビル』の構成に対応するように、『タンクレッド』では、エヴァを中心にタンクレッドとファクルディーン、エヴァの父親ベッソー、それに修道院長のラーラという人物で構成されている。

人間関係の構図ばかりでなく、場所の役割も似ている。『シビル』では、修道院廃墟でシビルとエグルモントは初めて出会うのに対し、『タンクレッド』では、ベタニヤ近くの庭園でエヴァとタンクレッドは出会う。いずれも偶然に出会うことになっているが、この場は彼らを結びつける象徴的な場である。エグルモントがマンチェスターに出むくように、タンクレッドはエルサレムへ出かける。マンチェスターを代表する、人民の娘たるシビルと貴族のエグルモントが結婚して、「二つの国」は解消されることになっている。『タンクレッド』は、マリアと同じユダヤ女性のユダヤ教徒エヴァとイギリスからきたキリスト教徒タンクレッドが結ばれるかどうか問われるのである。

タンクレッドは「偉大なるアジアの神秘」を究めるために、聖蹟を彷徨う。600年前に彼の祖先が十字軍としてやってきて祈った、ダビデの空の墓前にひざまずくが、「天の声はまだ聞こえてこない」。⁹¹⁾ラーラのすすめでカルヴァリからシナイへ向かうことにする。ベツレヘムの見えるところで夜明けを迎える。

Form Bethlehem to Hebron, Canaan is still a land of milk and honey, though not so rich and picturesque as in the great expanse of Palestine to the north of the Holy City. The beauty and the abundance of the promised land may still be found in

Samaria and Galilee; in the magnificent plains of Esdraelon, Zabulon, and Gennesareth; and ever by the gushing waters of the bowery Jordan.⁹²⁾

タンクレッドはユダヤ人ではないが、「約束の地」と称して、ここに出してくる地名は、現在のイスラエルがほぼ手中に納めている地である。巡礼を続けるタンクレッドは瞑想する。「この荒廃は一体なぜなんだ？ その言葉が数えきれない時代の英知である王たち、今の瞬間その名前を呼ぶだけで、地中海の波から遙か彼方のインドの大河まで、オリエントの心を沸きたたせるあの王たちはなぜ今存在しないのか？」約束の地は、地中海、インドまで広がっている。ここにいうオリエントは、実際はユダヤを指していることは、聖書とのコンテクストで明らかである。ユダヤ人でないタンクレッドがなぜこんなことをいうのだろうか。一つは、非ユダヤ人をユダヤイズム (Judaism) に引き込むのが意図されているからではないだろうか。この瞑想に続く文に『タイムズ』(The Times) は激怒した。

And yet some flat-nosed Frank, full of bustle and puffed up with self-conceit (a race spawned perhaps in the morasses of some Northern forest hardly yet cleared), talks of Progress! Progress to what, and from whence? Amid empires shriveled into deserts, amid the wrecks of great cities, a single column or obelisk of which nations import for the prime ornament of their mud-built capitals, amid arts forgotten, commerce annihilated, fragmentary literatures and populations destroyed, the European talks of progress, because, by an ingenious application of some scientific

acquirements, he has established a society which has mistaken comfort for civilisation.⁹³⁾

‘Frank’ とは、先に引用したエヴァの言葉、‘you of those Frank’ がタンクレッドを指しているように、近東地方で、(西) ヨーロッパ人を意味する。‘flat-nosed’ (鼻の平たい) も、ユダヤ人について鼻が強調されることから、意識的に挑戦した言いまわしと考えられる。ディズレーリは『種の起源』を読んでいたようだが、進化論には否定的であったことは触れた。⁹⁴⁾ この作品は『種の起源』より12年前に出版されているので、進化という言葉は使われていないが、進歩の概念をはっきり否定している。「文明を快適と勘違い」している「鼻べたのヨーロッパ人」と、どうして作者は挑発するのだろうか。ユダヤ人偏見へのショック療法と考えたのか、それとも本気に進歩を否定したのか、定かでないが、『タンクレッド』は過去に価値を求め、歴史を遡上することで、ユダヤに行きつくというのが筋立である。

砂漠を旅している途中で、ファクルディーンの陰謀でタンクレッドは捕われ、エヴァの祖父エテロ (Jethro) の支配する部族の人質となって身代金を要求される破目になる。ここでタンクレッドとファクルディーンが初めて接触する。タンクレッドが「詐欺」ではなく「信仰」(faith)こそ力になると説かれ耳を傾ける。

‘See now,’ said Tancred, with unusual animation, ‘I find no charm in conquering the world to establish a dynasty: a dynasty, like everything else, wears out; indeed, it does not last as long as most things; it has a precipitate tendency to decay. There are reasons; we will not now dwell on them. One should conquer the

world not to enthrone a man, but an idea, for ideas exist for ever. But what idea? There is the touchstone of all philosophy! Amid the wreck of creeds, the crash of empires, French revolutions, English reforms, Catholicism in agony, and Protestantism in convulsions, discordant Europe demands the keynote, which none can sound. If Asia be in decay, Europe is in confusion. Your repose may be death, but our life is anarchy.¹⁹⁵⁾

人は問を發したとき、ある程度答はできているのかもしれない。「偉大なるアジアの神秘を究める」といったとき、それは白紙の状態ではなく、天秤の皿は「アジアの神秘」肯定に傾いているのである。引用の‘what idea?’ とタンクレッドがいえば、答えは出ている。殆ど誘導するように、諸々の信条、諸帝国、フランス革命、イギリスの諸改革、カトリック、プロテスタントを退ければ、ディズレーリが常に主張してきたもの、ユダヤしか残らないではないか。「アジアが衰退すれば、ヨーロッパが混乱する」となると、アジア即ちユダヤが力をもたないと、ヨーロッパが滅びるといふ、強引な結論になる。感謝してファクルディーンがタンクレッドに吐露する考えは、まさにディズレーリがとった政策なのだ。前者は後者に、「君はぼくにしたように女王も引きつける (magnetise) だろう。英国に帰って、手筈をととのえよ」⁹⁶⁾とすすめたあと、次のように述べる。

Let the Queen of the English collect a great fleet, let her stow away all her treasure, bullion, gold plate, and precious arms; be accompanied by all her court and chief people, and transfer the seat of her empire from London to Delhi. There she will find

an immense empire ready made, a first-rate army, and a large revenue. In the meantime I will arrange with Mehemet Ali. He shall have Bagdad and Mesopotamia, and pour the Bedouin cavalry into Persia. I will take care of Syria and Asia Minor. The only way to manage the Afghans is by Persia and by the Arabs. We will acknowledge the Empress of India as our suzerain, and secure for her the Levantine coast. If she like, she shall have Alexandria as she now has Malta: it could be arranged. Your Queen is young; she has an *avenir*. Aberdeen and Sir Peel will never give her this advice; their habits are formed. They are too old, too *rusés*. But, you see! the greatest empire that ever existed; besides which she gets rid of the embarrassment of her Chambers! And quite practicable; for the only difficult part, the conquest of India, which baffled Alexander, is all done!¹⁹⁷⁾

現地勢力を利用しつつ中近東を支配下に納め、その先のインドを植民地化する。そしてその頂きにヴィクトリア女王をインド女帝として迎えることはディズレーリの描いた構想と合致する。これをユダヤ人——ファクルディーンはアラブ人であり、「アラブ人は馬に騎ったユダヤ人だ」と作中言及されている——に言わせているのは、イギリス人への誘いだと思われる。

この後、タンクレッドはシナイ山に上り、そこで待望の啓示をうける。厳粛であるべきシーンだが、ファルスめいた滑稽を感じるのは否定しがたい。「おお、主、イスラエルの神よ、宇宙の創造主よ！ キリスト教国の子なる私は、苦しめるヨーロッパの心を吐露するために、古き汝のアラビアの祭壇に参りました」⁹⁸⁾この呼びかけは、すでに

英国国教徒の言葉ではない。国教徒が聞けば、激怒したであろう。天使が空中より現われる。しかも自ら、「われはアラビアの天使なり」という。ハーマン・ラウントリーの当時の挿絵を見ると、思わず笑ってしまうのではなからうか。天使はディズレーリになり変って、2頁にわたって、ジャーナリスティックな語調で託宣する。

The thoughts of all lands come from a higher source than man, but the intellect of Arabia comes from the Most High. Therefore it is that from this spot issue the principles which regulate the human destiny... The equality of man can only be accomplished by the sovereignty of God. The longing for fraternity can never be satisfied but under the sway of a common father. The relations between Jehovah and his creatures can be neither too numerous nor too near. In the increased distance between God and man have grown up all those developments that have made life mournful. Cease, then, to seek in a vain philosophy the solution of the social problem that perplexes you. Announce the sublime and solacing doctrine of theocratic equality. Fear not, faint not, falter not. Obey the impulse of thine own spirit, and find a ready instrument in every human being.¹⁹⁹⁾

「アラビアの知恵は神から来ているものだ。それゆえ、人類の運命を決する原則はこの地から発せられるのだ」と天使はいう。ここにいう「アラビア」とはイスラエルのことであり、「神」はユダヤ教の神エホバであることはいうまでもない。「人類の平等は神の統治によってしか達成されえ

ない」。そしてその神はエホバなのである。「あなたを苦しめている社会問題の解決をくだらぬ哲学に求めることはやめよ。神による平等の崇高にして癒しの原則を人類に高らかに告げよ」。この神はエホバである。全世界をユダヤ教に染めよ、というのに等しいのである。

この御託宣がタンクレッドの以後の行動方針となる。というより、これまでも、イギリスでエルサレムへ巡礼すると言った時点から、この方向で彼は生きてきたということであろう。始めに結論ありき、といえようか。それがより鮮明になった、というべきかもしれない。その数日後に、タンクレッドは次のように言っている。

‘And the Turks have artillery and cannot use it,’ said Lord Montacute. ‘Why, the most favoured part of the globe at this moment is entirely defenceless; there is not a soldier worth firing at in Asia except the Sepoys. The Persian, Assyrian, and Babylonian monarchies might be gained in a morning with faith and the flourish of a saber.’

‘You would have the Great Powers interfering,’ said Baroni.

‘What should I care for the Great Powers, if the Lord of Hosts were on my side!’

‘Why, to be sure they could not do much at Bagdad or Ispahan.’

‘Work out a great religious truth on the Persian and Mesopotamian plains, the most exuberant soils in the world with the scantiest population,—it would revivify Asia. It must spread. The peninsula of Arabia, when in action, must always command the peninsula of the Lesser Asia. Asia revived would act upon Europe. The

European comfort, which they call civilisation, is after all, confined to a very small space: the island of Great Britain, France, and the course of a single river, the Rhine. The greater part of Europe is as dead as Asia, without the consolation of climate and the influence of immortal traditions.¹⁰⁰

「地球上の最も恵まれた所」というのは、中近東のことである。そこを「信仰」と「サーベル」で一気に獲得できるという。「ペルシヤとメソポタミア平野、世界で最も人口の少ない、最も豊沃な土地に偉大な宗教の真実を行使せよ、さすればアジアは復活するのだ」。アラビア半島は小アジアを支配する。そして、「復活したアジアはヨーロッパに力を及ぼす」。広大な構想ではあるが、異教徒から見るときわめて危険な恐ろしい構想である。ディズレーリは「アジア」と曖昧に表現するけれど、それはユダヤ教で理論武装した、エルサレム中心の地域のことを指しているのである。

天使の託宣の箇所から100頁あとで、タンクレッドはファクルディーンに、天使と同じ言葉で語っている。「世界征服は、よき兵士であるばかりでなく、何ものも抗いがたい、至高の原則によって活性化された人々が達成するものだ。……それは、われわれは封建制度の助けをかりて神の下の平等 (a theocratic equality) を樹立して行くことだと思える」。¹⁰¹ 「至高の原則」も「神」も、ユダヤ教であり、エホバであることを思えば、「新十字軍」の理念は、それに反する者にとっては恐るべき破壊の理念とならざるを得ない。

この作品には、小説の流れと異なる二つのエピソードが含まれている。一つは、バローニが語る、「バローニ家の歴史——シドーニアの人生における一章として」というものである。旅まわりのバラエティ・ショーをしていたバローニ一家をまだ

20歳のシドーニアが金とコネにももの言わせて出世させる話である。バローニは現在はシドーニアの私設スパイをしている。シドーニアの情報源の一つである。

もう一つのエピソードは、エピソードとしては長い物語である。レバノンの山中にあるアンサレイ (Ansarey) という国で、アスタルテ (Astarte) という名の女王が支配している。この種族はヘレニズムを信奉しており、ギリシャ・ローマの神々を祭って拝んでいる。100頁以上に渡ってこの女王と種族とその祭祀のことを作者は書いているのだが、その意図は定かでない。アスタルテはフェニキア人が崇拝した古代セム族の豊穡と生殖の女神であり、ヘブライ人のアシュトレト (Ashtoreth) にあたり、ギリシャのアフロディテ、ローマのヴィーナスとなる。女王自身が私の名前はそこから来たといっている。ヘブライズムとヘレニズムの結合を模索したのか、それとも、ヘレニズムよりヘブライズムの方が古いことを示唆したのか、他の意味をこめたのか、私にとっては今後の課題である。いずれにしろ女王はタンクレッドに恋をするけれど、外敵が攻めこんできて、タンクレッドを去らせて、二人の関係は終る。

ディズレーリは章を沢山作ることによって、好きな時に好きなことを挿入する。タンクレッドとアスタルテの会話の最中にファクルディーンの章がくる。ファクルディーンの質問に答えて、タンクレッドがいう。

'But truth had descended from Heaven before Jesus,' replied Fakredeen; 'since, as you tell me, God spoke to Moses on Mount Sinai, and since then to many of the prophets and the princes of Israel.'

'Of whom Jesus was one,' said Tancred; 'the descendant of King David as well as the Son of God. But through this last and

greatest of their princes it was ordained that the inspired Hebrew mind should mould and govern the world. Through Jesus God spoke to the Gentiles, and not to the tribes of Israel only. That is the great worldly difference between Jesus and his inspired predecessors. Christianity is Judaism for the multitude, but still it is Judaism, and its development was the death-blow of the Pagan idolatry.¹⁰²⁾

中世なら異端審問にかかるような答えである。但しこれは、天使からの啓示以前からシドニアも言っていたし、ディズレーリの議会でのスピーチにも出てくる考えである。「イエスを通して神は異邦人 (the Gentiles) に話された。……キリスト教は多教者のためのユダヤ教であるが、なおもキリスト教はユダヤ教なのだ。その発展は異教の邪神崇拜に対する致命的打撃だった」。この言葉は、『タンクレッド』のテーマであるし、作者が最も伝えたいメッセージだと思われる。‘gentile’とは、ユダヤ人からみた異邦人、殊にキリスト教徒を指す。タンクレッドは完全にユダヤ人になりきっている。二人の会話は続く。

‘The house of David is worshipped at Rome itself, at every seat of great and growing empire in the world, at London, at St. Petersburg, at New York. Asia alone is faithless to the Asian; but Asia has been overrun by Turks and Tatars. For nearly five hundred years the true Oriental mind has been enthralled. Arabia alone has remained free and faithful to the divine tradition. From its bosom we shall go forth and sweep away the moulding remnants of the Tataric system; and then, when the

East has resumed its indigenous intelligence, when angels and prophets again mingle with humanity, the sacred quarter of the globe will recover its primeval and divine supremacy; it will act upon the modern empires, and the faint-hearted faith of Europe, which is but the shadow of a shade, will become as vigorous as befits men who are in sustained communication with the Creator.¹⁰³⁾

この小説には、このような主張は形をかえ、到るところにばら撒かれている。繰り返しは説法の極意かもしれない。「アラビアだけが神の伝統に他のものにとらわれず忠実であった。その胸中から出撃して、トルコのかびの生えたシステムの残滓を一掃することになる。その時東方世界は本来の英知をとり戻し、天使と預言者は再び人間と交わり、地球の聖なる地は原初からある神の至高性を回復するだろう。それが現代の帝国に力を発揮するのだ」。「アラブは馬に騎ったユダヤ人だ」とバローニはいつているので、ここにあるアラビアはユダヤのことである。新十字軍はキリスト教のみならず、その原初のユダヤ教をも後楯にして、トルコの世界を攻め滅ぼす、ということになるだろう。ユダヤ人に後押しされたブッシュ米国が、イラクに攻めこんだのも、この思想の具現の一つなのかもしれない。

小説はいよいよ終末に入る。‘Disraeli had conceived the love between Eva and Tancred, as a symbol of his most important message, the synthesis between Judaism and Christianity.’¹⁰⁴⁾とセアラ・ブラッドフォード (Sarah Bradford) は指摘している。コニングズビーとイーディス、エグルモントとシビルを結婚させて、貴族と産業資本、貴族と人民との葛藤と反目を解消させてきた。今度はユダヤ教とキリスト教を結婚させよう

とするのである。

‘Why, thou to me art Arabia,’ said Tancred, advancing and kneeling at her side. ‘The angel of Arabia, and of my life and spirit! Take not to me of faltering faith: mine is intense. Talk not to me of leaving a divine cause: why, thou art my cause, and thou art most divine! O Eva! deign to accept the tribute of my long agitated heart! Yes, I too, like thee, am sometimes full of despair; but it is only when I remember that I love, and love, perhaps, in vain!’...

‘There are those to whom I belong; and to whom you belong. Yes,’ she said, trying to withdraw her hand, ‘fly, fly from me, son of Europe and of Christ!’

‘I am a Christian in the land of Christ,’ said Tancred, ‘and I kneel to a daughter of my Redeemer’s race. Why should I fly?’

‘Oh! this is madness!’¹⁰⁵⁾

タンクレッドの求愛をうけて、エヴァは揺れる。彼を受け入れる寸前までくる。「エヴァの顔は彼の肩に伏せた。彼はその頬を抱きしめた」。とその瞬間、エヴァのいう、「あなたの属している人たち」、即ち、タンクレッドの両親がイギリスから到着するのである。小説は、‘The Duke and Duchess of Bellamont had arrived at Jerusalem.’ で結ばれる。このオープン・エンディングをいかに解釈するかは読者に任せられている。大方の批評家は結婚は成立しないと見るのだが、どうであろうか。

V. 結 び

『コニングズビー』、『シビル』および『タンクレッド』は、ディズレーリの「青年英国党」三部作である。タイトルは人名であるが、それぞれの副題「新世代」、「二つの国」および「新十字軍」が作品のテーマを示唆している。「新世代」は新トーリー主義の旗手がトーリー党の中なる若き勇者「青年英国党」であり、彼らこそホイッグから政権を奪還し、新しいトーリー党を建設するものということを表している。「二つの国」は「持てる者」と「持たざる者」を統合するものは「青年英国党」であることを描く。「新十字軍」はユダヤ主義の優越性と、新しい十字軍を創出してイスラエルの国を樹立することが、世界を益することを唱っている。『コニングズビー』が世間的にもっとも、『シビル』はそれにつぐ成功を納め、『タンクレッド』は毀誉褒貶にさらされた。その理由は案外単純かもしれない。「青年英国党」は事実上『シビル』を書き終えたときには互解していた。¹⁰⁶⁾ディズレーリと他の青年貴族たちがはっきりとした政治的原則で結合していたわけではなく、互いに利用できることは消失していたといえるかもしれない。しかし、ディズレーリからみれば、これによって政治的地歩を一つ固めることは第一段階であって、真の目的は『タンクレッド』で果す意図ではなかったかと思われる。この作品では彼の創作意識から「青年英国党」は影が薄くなって、「ユダヤ主義」が前面に露骨に出てくる。これが毀誉褒貶の少なくとも一因であったらうと思う。マルローが次のようにいっているのは、その辺の事情であろう。

Tancred was a strange book, courageous and rash. It shocked many people. Carlyle found Disraeli's Jewish jackasseries intol-

erable, and asked how long John Bull would allow this absurd monkey to dance on his chest.¹⁰⁷⁾

私はこの論文を、今年の拙論、「*Daniel Deronda*におけるユダヤについて」の延長として書き始めた。ジョージ・エリオットが「ユダヤ」をテーマとした前にどのような道が拓けていたのかを探る目的で、ディズレーリの「ユダヤ」を考えるためであった。エリオットは1848年の初め頃、J・シブリー(Sibree)宛の手紙で、『タンクレッド』を読んでから少し時間が経っているので、細部までは鮮明に思い出すことはできません。でも、大変『浅薄な』(thin)もので、『コニングズビー』や『シビル』と比べると劣っていると思いました¹⁰⁸⁾と述べている。‘thin’は「うすい」という意味なので、「浅薄」以外にも含意は広いが、「劣っている」という言葉がくるから、評価していないことは確かである。続く部分で、シドーニアのユダヤ人種の優秀性の言葉を揶揄している。「非ユダヤ人の本性からいって、ユダヤ人を優越とする仮説には断固反対ですし、ヴォルテールの悪罵によるこんで共鳴したいぐらいです」と書いたあと、続ける。

I bow to the supremacy of Hebrew poetry, but much of their early mythology, and almost all their history, is utterly revolting. Their stock has produced a Moses and a Jesus; but Moses was impregnated with Egyptian philosophy, and Jesus is venerated and adored by us only for that wherein He transcended or resisted Judaism. The very exaltation of their idea of a national deity into a spiritual monotheism seems to have been borrowed from the other oriental tribes. Everything specifi-

cally Jewish is of a low grade.¹⁰⁹⁾

この長い手紙には、後にユダヤ主義を肯定する『ダニエル・デロンダ』を書く要素は散見されるが、カーライルと同じ側に立っていたことは明らかである。

世間の激しい反発にも拘らず、ディズレーリは『タンクレッド』が自分の作品中最も好きなものであるといい続けた。その理由は、この作品がユダヤ精神を最も強く主張しているからではないだろうか。そして、世間がなんといおうと——後世も同じなのだが——この作品に執着したのは、『タンクレッド』こそ、三部作の総仕上げだからである。シドーニアは『シビル』には出てこなかったし、三部作を通じて実際の登場頁は多くはないけれど、この三部作すべての支配者であった。他の登場人物たちは、実在のモデルがあるにもかかわらず、ディズレーリの魔術で、シドーニアの操り人形になっているのである。

上記のことは、ディズレーリ自身の言葉で裏打ちされるだろう。首相として最終期を迎えた頃のディズレーリに、ある牧師が、『タンクレッド』で述べられている「偉大なるアジアの神秘」の意味を手紙で尋ねたところ、ディズレーリは私設秘書用に手紙の裏に次のように書き入れた。

Write to this gentleman that, as I have written three volumes to answer the question he asks, and, so far as he is concerned, have failed, it would be presumption to suppose I could be more fortunate in a letter. Recommend repeated, and frequent, study of the work as the most efficient means for his purpose. —D.¹¹⁰⁾

「お尋ねの問に答えるために、私は3冊の本を書きました」と彼が書いたのは、『コニングズビー』、

『シビル』、『タンクレッド』の三部作のテーマは「偉大なるアジアの神秘」であると解釈できるだろう。勿論、三作で扱われているのはそればかりではないが、少なくとも三作を貫く重要なテーマがユダヤの神秘であるということである。そして、文学史的には三作のうち最も劣るといわれながらも、この言葉が出ている『タンクレッド』がこのテーマを最も強烈に訴えたのであり、ディズレーリにとって一番好きな作品だということは、この作品に最も強いストレスを置いたと考えられないだろうか。なぜなら、「偉大なるアジアの神秘」——曖昧に「アジア」といっているが、既述したようにユダヤのことである——は彼の生涯一貫したテーマであったからである。

1833年3月に出版された、『アルロイ』(Alroy)は、1830年から31年にかけての東方を含めた旅行中に書かれた小説である。この作品のテーマは、『タンクレッド』と酷似している。時代は12世紀なのだが、後者と同様、シオニズムが強く匂っている。アルロイはイスラエルの独立を勝ちとって、過去の栄光をとり戻そうと考えている。ユダヤ僧ジャバスターのすすめで、エルサレムに行き、ソロモン王の王笏を受ける。西アジアからセルジュクトルコ人を一掃する。しかし、ジャバスターのような神国には満足できない。

Is the Lord of Hosts so slight a God, that we must place a barrier to His sovereignty, and fix the boundaries of Omnipotence between the Jordan and the Lebanon?¹¹¹⁾

「万軍の主(エホバ)はその主権に障壁をおかれて、ヨルダンとレバノンの間に万能の境界をつくられるほどちっぽけな神だろうか」。このアルロイの考えは大イスラエルの主張である。この後自らの驕慢のゆえに、イスラムの王妃に心を許し、サルタンのイスラム軍によって、彼の王国は滅び

る。虜囚となったアルロイは、ユダヤ教を棄てれば命を助け自由を与えるという誘惑にうち勝って殉教者になる。「私はわが国を裏切ってしまった」と嘆く彼に、妹が慰める。

'Oh no, no, no! You have shown what we can do and shall do. Your memory alone is inspiration. A great career, although baulked of its end, is still a landmark of human energy. Failure, when sublime, is not without its purpose. Great deeds are great legacies, and work with wondrous usury. By what Man has done, we learn what Man can do; and gauge the power and prospects of our race.'¹¹²⁾

この妹のモデルはディズレーリの妹のセアラ・ディズレーリである。「あなたはわたしたちが出来ること、なすべきことを示して下さい。……人間が成し遂げることによって、わたし達は人間が何ができるかを学ぶのです。そしてわが民族の力と展望をはかることができるのです」。アルロイがしたことは、小イスラエルで満足せず、大イスラエルに乗り出して失敗したことであった。これによって、「わたしたちのなすべきこと」が示されたというとき、『タンクレッド』のテーマに直結していないだろうか。

「青年英国党」三部作を論じたとき、作者は美しい言葉を並べるだけで、実際の解決策も実行も伴っていないことを指摘した。これは私ばかりでなく、発表当時に多くの人から指摘されたことである。しかし、書き出しで、「ディズレーリが英国近代史で演じた役割の大きさとその抛って来るところに興味を惹かれた」とも申し述べた。三部作に出てくる主人公達は、作品の中で具体的な政治活動はとりあげるほどのことはしていない。しかし、実際の政治の世界で、小説で描いたヴィジョ

ンの矛盾を最終的には外国への侵略によって解消して行くのである。アルロイは失敗したが、作者のディズレーリは成功したといえるのではないだろうか。作品と作家を混同してはならぬ、ということは現代文芸批評の鉄則かもしれない。しかし、ディズレーリの場合は、意図的に混同しているので、読者の方もその混同を許していただけるものと思う。彼の小説があれほど読まれたのも、モデル小説であったことが大きな原因の一つであった。

ディズレーリは1832年にいよいよ政界に乗り出す。最初の二回は「ラディカル」として選挙に臨むが、落選する。それからトーリーに鞍がえする。また二度落選するけれど、トーリーこそ寡頭制に対して国民の自由を守る闘士であるという主張を『タイムズ』に投稿したり、パンフレットで宣伝して、政治的な足場を固めていった。1837年に遂に下院（The House of Commons）の保守党議員になる。1839年に、同じ選挙区のウィンダム・ルイス（Wyndham Lewis）の未亡人メアリ・アン（Mary Anne）と結婚し、議席と財力を確かなものにする。因みに、1837年7月27日午前11時に妹セアラに出した手紙には、ルイス707票、ディズレーリ616票、ラディカルのトムスン412票とある。¹¹³⁾『シビル』は妻となったメアリ・アンに、「完全な妻」（a perfect Wife!）として献げられている。

「青年英国党」三部作は、政界で安定したディズレーリが、ピラミッドを登る第二段階として出版されたものと考えていいだろう。40歳の男が保守党の中に若いセクションを作り、保守党の党首をうかがうのである。わが国の小泉首相の作戦と似ている。抽象的な感覚に訴えるキャッチフレーズで国民を捉えようとする、安倍首相も似ている。安倍氏がディズレーリのファンであることは首肯できよう。¹¹⁴⁾但し、ディズレーリはこの三部作で着実に地歩は築いたが、最初に首相になったのは64歳の時であり、それも1年にみたない短期間で

あった。

しかし、このダービー（Derby）・ディズレーリ内閣で、5年後にディズレーリはグラドストーン内閣を倒して第2次ディズレーリ内閣発足の足場を築くのである。ディズレーリの狙いはただ一点グラドストンの威力をそぐことであった。「改革」において自由党に遅れをとった保守党は、その改革の旗を自らも必要としていた。第2次選挙法改正法は、もともとグラドストーン内閣が提案していたものである。下院は辛うじて通過したが、自党内の反対派の攻撃をうけて総辞職する。その後のダービー・ディズレーリ内閣が、提出して通過した。「保守党は自由党の入浴中その衣服を盗んだ」といわれる所以である。¹¹⁵⁾

これにより百万人の選挙人が増えた。一見、労働者のための法律に見えるが、そして実際、右にも左にも民主主義への手段と思われたのだが、実は保守に有利な法律であった。¹¹⁶⁾ディズレーリは名を捨て実を取ったといえるかもしれない。都市部で134%も増えたのに対し、保守の地盤である農村部では54万から79万に増えただけで、従来通りであったし、もっと有利なからくりがあった。議席の再配分が実施されたのだが、45議席のうち25議席が保守地盤の州にまわされ、大量に選挙人が増えたマンチェスター、バーミンガム、リーズ、リヴァプールにはそれぞれ3議席増えただけなのである。『コニングズビー』や『シビル』で労働者の味方をセールス・ポイントにしていた、「青年英国党」は結局労働者側でないことは、事実でも証明されたのではないだろうか。

この選挙制度のもとで保守が大勝した1874年にディズレーリは、先のような暫定ではない内閣の首相となる。「二つの国」の統一を、貴族のエグルモントと人民の娘なるシビルの結婚で表現したけれど、そのシビルも結局は大貴族の末裔としたディズレーリが、果して「二つの国」を一つにできるのだろうか？ 権力は絶対に一方に渡さな

い 'Tory Democracy' なるものは、それ自体矛盾を孕んでいる。ディズレーリはその解決策を、1872年6月、水晶宮での演説で提示する。「帝国の保持と国民の状況の改善 (the preservation of our Empire and the improvement of the condition of the people)」¹¹⁷⁾がそれだ。言い換えれば、帝国主義にほかならない。これが彼の政策となり、大英帝国の道を決定することになる。

As he said, in a famous comment, 'I have always considered that the Tory party was the national party of England' This meant an emphasis on the mutual interests of the working classes and the classes above them, led by their 'natural' leaders in the Conservative Party, in supporting the country's institutions — Monarchy, Church, Aristocracy — as outlined in the Prime Minister's earlier speeches. It also meant, more importantly, a vigorous foreign and imperial policy. This can be seen in Disraeli's purchase of the Suez Canal shares, his belligerent attitude towards Russia in 1878, and his 'forward' policies in Afghanistan and South Africa 1879.¹¹⁸⁾

スエズ運河は、1875年に財政的に行き詰ったエジプトの大守から買収した。その際に要した400万ポンドは、シドーニアのモデル、ロスチャイドからの融資である。これによりエジプトを経た最短距離のインド経営が可能となった。結果、1876年ヴィクトリア女王に「インド女帝」(Empress of India)の称号を捧呈することを提案して、翌年1月1日に実現した。まさに、『タンクレッド』でファクルディーンが言ったことを現実化したのである。ディズレーリが念願の貴族 'Earl of Beaconsfield' に叙されたのもほぼ同時期である。

『アルロイ』、『タンクレッド』で最も前面に出ていたシオニズムについてはどうだろうか。シオニズムは公式には1897年8月にバーゼルで開かれた第一回世界シオニスト会議を嚆矢とするが、シオン復帰願望は昔からあった。現在のイスラエル国樹立についても、テオドール・ヘルツェルが「バーゼル憲章」をまとめるまでに、前史がある。ジョージ・エリオットの『ダニエル・デロンダ』が精神的な支えとなったことは、以前に述べたことがある。ディズレーリは彼女の前の——エリオットはシオニストではないが——シオニストである。上記の作品で、エルサレムを含む「約束の地」にユダヤ人の国を建国する意志と試行が書かれていた。「約束の地」とは何であろうか。その根拠は、旧約聖書「創世紀」第15章である。「是日^{このひ}にエホバ、アブラムと契約をなして言たまひけるは我^{われ}此^{この}地^ちをエジプトの河より彼^{かの}大河^{おほかわ}即ちユフラテ河^ままで爾^{なんぢ}の子孫^{びと}に與ふ。即ちケニ人^{びと}ケナズ人^{びと}カデモン人^{びと}、ヘラ人^{びと}ペリジ人^{びと}レパイム人^{びと}、アモリ人^{びと}カナン人^{びと}ギルガン人^{びと}エブス人^{びと}の地^{これ}是なり」の文章だ。ユダヤ教徒でない私には非常に奇異に感じられる。自分の信仰する宗教書で、神が約束したのだから我々の土地なのだ、などという論理がまかり通るということはどういうことなのか？ 『古事記』に書いてあるからといって、日本人が他国を要求すれば、ユダヤ教徒やキリスト教徒は納得するのだろうか？ ましてや、神の言葉にすでに、そこにはケニ人^{びと}以下10の民族が住む地とある。当時から他人の地を神さまがあげると約束したのだ。抗争が生じるのは当然であろう。アルロイやタンクレッドが活動する地域はいわゆる大イスラエルである。神の言葉がどこからどこまでを指しているか不明なので、大きい方の解釈をする人たちが「大イスラエル」派と呼ばれ、現在のイスラエルの最右翼の人たちの見解である。ディズレーリの考える「約束の地」がどこなのかははっきりしないが、上記の二作は「大イスラエル」の地を示唆している。

1851年1月、カリントン卿邸の私園を歩いていたとき、連れのスタンリー卿 (Lord Stanley)、当時24歳の青年貴族に、ディズレーリは、ユダヤ人のパレスティナ復帰について熱っぽく語った。スタンリーは日記に彼の言葉を書き留めている。

The country, he said, had ample natural capabilities: all it wanted was labour, and protection for the labourer: the ownership of the soil might be bought from Turkey: money would be forthcoming: the Rothschilds and leading Hebrew capitalists would all help: the Turkish empire was falling into ruin: the Turkish Govt would do anything for money: all that was necessary was to establish colonies, with rights over the soil, and security from ill treatment. The question of nationality might wait until these had taken hold.¹¹⁹⁾

『タンクレッド』出版より4年足らずの出来事なので、ディズレーリの言葉は、この作品の夢の実現を語っているように思える。そしてその後の英国の外交政策とシオニズムの動向は彼の言葉に完全に合致する。ディズレーリ死後のことであるが、「サイクス・ピコ条約」でオスマン・トルコ領の一部を獲得するし、1917年11月に「バルフォア宣言」をロスチャイルド卿にバルフォア外相が送る。「ユダヤ人のためのナショナル・ホームをパレスチナに樹立することに賛成する」と明言したものである。そして遂にイスラエル国が出来る。1948年5月14日、テルアビブ市ロスチャイルド通りのテルアビブ美術館でユダヤ人機関議長デビッド・ベングリオンがヘブライ語の独立宣言を読み上げる。「我々人民評議会議員は、イスラエルの地のユダヤ人社会とシオニズム運動を代表し、イスラエルの地に対する英委任統治が終了するこの日、

ここに参集した。我々の自然で歴史的な権利に基づき、また国連総会決議を踏まえ、イスラエル国として知られることとなるユダヤ人国家をイスラエルの地に樹立することを宣言する」。¹²⁰⁾1990年1月15日、シャミル首相は、大移民を吸収するためには「大イスラエル」が必要になる、と言った。「青年英国党」三部作とその後は、ディズレーリの言ったことが実現して行く英国史であり、イスラエル建国への道であった。精神的に、文学的に『ダニエル・デロンダ』は、比較にならないほどディズレーリの文学業績を越えているが、歴史はディズレーリの時代の読みの深さを明証している。イスラエル建国までの道程を顧みるに、ユダヤ主義の真髄は前進と拡張ではないのだろうか。

注

- 1) William Flavelle Monypenny, *The Life of Benjamin Disraeli* (London: John Murray, 1912), Vol. II, p.197.
- 2) *Coningsby (The Works of Benjamin Disraeli, XII)*, pp.xv-xvi.
- 3) Sarah Bradford, *Disraeli* (N.Y.: Stein & Day, 1983)
- 4) Walter Allen, *The English Novel* (1954) (Harmondsworth: Penguin, 1991), p.154.
- 5) *Ibid.*, p.57.
- 6) *Ibid.*, p.52.
- 7) *Ibid.*, p.151.
- 8) *Ibid.*, p.154.
- 9) *Ibid.*, pp.156-57.
- 10) *Ibid.*, p.160.
- 11) *Ibid.*, p.161.
- 12) *Ibid.*, p.168.
- 13) *Ibid.*, p.202.
- 14) *Ibid.*, p.203.
- 15) *Ibid.*, p.207.
- 16) *Ibid.*, p.213.
- 17) *Ibid.*, p.276.
- 18) *Ibid.*, p.279.
- 19) *Ibid.*, p.288.
- 20) *Ibid.*, pp.288-89.
- 21) *Ibid.*, p.319.

- 22) Ibid., pp.331–32.
 23) Ibid., p.334.
 24) Paul Smith, *Disraeli* (Cambridge: Cambridge U.P., 1996), p.68.
 25) *Coningsby* (*The Works of Benjamin Disraeli*, XIII) p.15.
 26) Ibid., p.133.
 27) Ibid., p.139.
 28) Ibid., p.193.
 29) Ibid., p.24.
 30) Ibid., pp.225–26.
 31) Sarah Bradford, p.140.
 32) ルイ・カザミアン著, 石田憲次, 白田昭訳『イギリスの社会小説 (1830–1850)』(1903), (研究社, 1958) p.246.
 33) *Sybil* (1845) (Harmondsworth: Penguin, 1980), p.27.
 34) Ibid., p.55.
 35) Ibid., p.60.
 36) Ibid., p.61.
 37) Ibid., p.56.
 38) Ibid., p.330.
 39) Ibid., p.330.
 40) Ibid., p.70.
 41) Ibid., p.81.
 42) Ibid., p.143.
 43) Joyce Marlow, *The Tolpuddle Martyrs* (1971), (St Albans: Granada, 1974), p.38.
 44) *Cybil* (Penguin), p.489.
 45) Ibid., p.96.
 46) Ibid., p.96.
 47) Ibid., p.134.
 48) Ibid., p.151.
 49) Ibid., p.156.
 50) Ibid., p.168.
 51) Ibid., p.169.
 52) Ibid., p.170.
 53) Ibid., p.178.
 54) Ibid., pp.178–79.
 55) Ibid., p.179.
 56) Ibid., pp.198–99.
 57) Ibid., p.202.
 58) Ibid., pp.203–4.
 59) Ibid., p.214.
 60) Ibid., p.224.
 61) Ibid., p.225.
 62) Ibid., p.225.
 63) Ibid., p.226.
 64) Ibid., p.226.
 65) Ibid., p.270.
 66) Ibid., pp.237–38.
 67) Ibid., p.300.
 68) Ibid., p.334.
 69) Ibid., p.337.
 70) Ibid., p.343.
 71) Ibid., p.350.
 72) Ibid., pp.350–51.
 73) Ibid., p.354.
 74) Ibid., p.357.
 75) Ibid., p.490.
 76) Ibid., p.489.
 77) Ibid., p.491.
 78) Ibid., p.491.
 79) Ibid., p.496.
 80) Ibid., pp.496–97.
 81) Ibid., p.497.
 82) Ibid., pp.145–46.
 83) Ibid., p.146.
 84) Ibid., p.147.
 85) *Coningsby*, pp.xvi–xvii.
 86) *Tancred* p.86
 87) 笈川博一『イスラエルの国と人』(時事通信社, 1986), p.153.
 88) *Tancred*, p.161.
 89) Ibid., p.191.
 90) Ibid., p.29.
 91) Ibid., p.75.
 92) Ibid., p.75–76.
 93) Ibid., p.78.
 94) シドーニアの所見参照。
 95) *Tancred*, p.95.
 96) Ibid., p.121.
 97) Ibid., p.122.
 98) Ibid., p.156.
 99) Ibid., pp.157–58.
 100) Ibid., p.175.
 101) Ibid., p.256.
 102) Ibid., p.335.
 103) Ibid., p.337.
 104) Ibid., p.181.
 105) Ibid., p.413.
 106) Bradford, *Disraeli*, p.140.
 107) André Malraux, *Disraeli* (1927) (London: Penguin, 1937), p.155.
 108) J.W. Cross, *George Eliot's Life: as Related in Her Letters and Journals* (Edinburgh and London: Blackwood, 1885), p.94.
 109) Ibid., p.95.

- 110) Monypenny, *The Life of Benjamin Disraeli*, Vol. III. p.41.
 111) *Alroy on The Prince of the Captivity (The Works of Benjamin Disraeli, VII)*, p.167.
 112) *Ibid.*, p.286.
 113) Monypenny, Vol. I, p.375.
 114) 『朝日新聞』2006.9.9.「天声人話」.
 115) 大野真弓編『イギリス史』(山川出版, 1965), p.220.
 116) Paul Adelman, Gradstone, *Disraeli and Later Victorian Politics* (Harlow: Longman, 1983), p.12.
 117) *Ibid.*, p.15.
 118) *Ibid.*, p.18.
 119) Paul Smith, p.96.

Bibliography

Primary Sources

- Disraeli, Benjamin, *The Works of Benjamin Disraeli, Earl of Beaconsfield: Vols. I-XX* (London and New York: M. Walter Dunne, 1904).
 Disraeli, B, *Coningsby; or, The New Generation* (Leipzig: Bernh. Tauchnitz Jun, 1844).
 Disraeli, Benjamin, *Sybil or The Two Nations* (1849), ed. Thom Braun (Harmondsworth: 1985).

Secondary Sources

- Abbott, B. H., *Gladstone and Disraeli* (London and Glasgow: Collins, 1972).
 Adelman, Paul, *Gladstone, Disraeli and Later Victorian Politics* (Harlow: Longman, 1983).
 Allen, Walter, *The English Novel: A Short Critical History* (Harmondsworth: Penguin, 1954).
 Alexander, P. S., *Textual Sources for the Study of Judaism*, ed. & tr. P. S. Alexander (Chicago: Chicago U. P., 1984).
 Baron, S. W., *A Social and Religious History of the Jews* (New York: Columbia U. P., 1952).
 Biberman, Matthew, *Mascurinity, Anti-Semitism and Early Modern English Literature* (Padstow: Ashgate, 2004).
 Bradford, Sarah, *Disraeli* (New York: Stein and Day, 1983).
 Chapman, Colin, *Whose Promised Land: The Continuing Crisis Over Israel and Palestine* (Oxford: A

- Lion Book, 1983).
 Cheyette, Bryan, *Constructions of 'the Jew' in English Literature and Society: Racial Representations, 1875-1945* (Cambridge: Cambridge U. P., 1993).
 Cheyette and Marcus (ed.), *Modernity, Culture and 'the Jew'* (Cambridge: Polity Press, 1988).
 Cohn-sherbok, Dan and El-alam, Dawoud, *The Palestine-Israeli Conflict* (Oxford: One World, 2001).
 Cohn-sherbok, Dan and Grey, Mary, *Pursuing the Dream: A Jewish-Christian Conversation* (London: D. L. T., 2005).
 Cross, J. W., *George Eliot's Life* (Edinburgh and London: William Blackwood, 1885).
 de Lange, Nicholas, *Judaism* (Oxford: Oxford U. P., 2003).
 Elton, Oliver, *A Survey of English Literature 1830-1880 Vols.1-2* (London: Edward Arnold, 1920).
 Goldberg, David and Rayner, John, *The Jewish People: Their History and Their Religion* (London: Penguin, 1987).
 Goodman, Martin (ed.), *The Oxford Handbook of Jewish Studies* (Oxford: Oxford U. P., 2002).
 Green, Nancy (ed.), *Jewish Workers in the Modern Diaspora* (Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press, 1998).
 Julius, Anthony, *T. S. Eliot, Anti-Semitism, and Literary Form* (Cambridge: Cambridge U. P., 1995).
 Kaufmann, David, *George Eliot and Judaism: An Attempt to Appreciate 'Daniel Deronda'*, trans. J. W. Ferrier (1877), (New York: Haskell House, 1970).
 Levin, Michael, *The Condition of England Question: Carlyle, Mill, Engels* (Basingstoke and London: Macmillan, 1998).
 Marlow, Joyce, *The Tolpuddle Martyrs* (1971), (St Albans: Granada, 1974).
 Maurois, Andre, *Disraeli*, trans. H. Miles (1927), (London: Penguin, 1937).
 Monypenny, William Flavelle, *The Life of Benjamin Disraeli, Earl of Beaconsfield* (London: John Murray, 1910).
 Nunbhai, S and Newton, K, *George Eliot, Judaism and the Novels: Jewish Myth and Mysticism* (Basingstoke: Palgrave, 2002).
 Rose, Gillian, *Judaism and Modernity: Philosophical Essays* (Oxford & Cambridge, USA: Blackwell, 1993).
 Sachar, Abram Leon, *A History of the Jews* (1930), (New York: Alfred A. Knopf, 1966).
 Said, Edward W., *The Question of Palestine* (1979),

- (London: Vintage, 1992).
- Scott, Walter, *Familiar Letters of Sir Walter Scott Vols.1-2* (Edinburgh: David Douglas, 1894).
- Sinsheimer, Hermann, *Shylock: The History of a Character* (New York: Benjamin Blom, 1947).
- Smith, Paul, *Disraeli* (Cambridge: Cambridge U. P., 1996).
- Spector, Sheila A. (ed.), *The Jews and British Romanticism: Politics, Religion, Culture* (Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan, 2005).
- Sykes, James, *Mary Anne Disraeli: The Story of Viscountess Beaconsfield* (London: Ernest Benn, 1928).
- Trevelyan, G. M., *History of England* (1926), (London: Longmans, 1962).
- Wheatcroft, Geoffrey, *The Controversy of Zion: How Zionism Tried to Resolve the Jewish Question* (London: Sinclair-Stevenson, 1996).
- Wheeler, Michael, *English Fiction of the Victorian Period 1830-1890* (London and New York: Longman, 1985).
- Young, G. M. (ed.), *Early Victorian: England 1830-1865 Vols.1-2* (London: Oxford U. P., 1934).
- 邦語文献 (邦訳を含む)
- 荒井章三・森田雄三郎『ユダヤ思想』(大阪書籍, 1985)
- 上田和夫『ユダヤ人』(講談社, 1986)
- 笈川博一『イスラエルの国と人——中東を内側から探る——』(時事通信社, 1986)
- 大野真弓編著『イギリス史 (新版)』(山川出版社, 1965)
- カザミアン, L.『イギリスの社会小説 (1830-1850)』石田憲次・白田昭 訳 (研究社, 1958)
- 木庭宏『ハイネとユダヤの問題——実証主義的研究——』(松籟社, 1981)
- グロス, J.『ユダヤの商人シャイロック』(1992) 富山太佳夫・越智博美訳 (青土社, 1998)
- 河野徹『英米文学の中のユダヤ人』(みすず書房, 2001)
- 佐藤欽也『湾岸戦争と中東世界——対決のドラマ——』(サイマル出版, 1991)
- 佐藤唯行『英国ユダヤ人——共生をめざした流転の民の苦悶——』(講談社, 1995)
- 芝生瑞和『パレスチナ』(文藝春秋, 2004)
- ジョンソン, P.『ユダヤ人の歴史』上下 石田友雄監修 阿川・池田・山田訳 (徳間書店, 1999)
- 高橋和夫『アラブとイスラエル——パレスチナ問題の構図』(講談社, 1992)
- 立山良司『イスラエルとパレスチナ——和平の接点をさぐる——』(中央公論新社, 1989)
- 立山良司『揺れるユダヤ人国家——ポスト・シオニズム——』(文藝春秋, 2000)
- 丹治愛『ドラキュラの世紀末——ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』(東京大学出版会, 1997)
- 野村真理『ウィーンのユダヤ人——19世紀末からホロコースト前夜まで——』(お茶の水書房, 1999)
- 三田誠広『ユダの謎・キリストの謎——こんなにも怖い, 真実の「聖書」入門——』(祥伝社, 2004)
- 村松剛『ユダヤ人——迫害・放浪・建国——』(中央公論社, 1963)
- 横田勇人『パレスチナ紛争史』(集英社, 2004)